
いつもきみのそばに・・・

苺タルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつもきみのそばに・・・

【NZコード】

N8798C

【作者名】

莓タルト

【あらすじ】

過去に辛い失恋で男はあるか、人間不信で人見知りの舞輝。親友が出したダンス投稿のビデオが決勝大会に残つて行くことになったTV収録。人気アイドル“S-Wing”^{スティング}に収録の後に食事に誘われたことから始まつた、舞輝の人間関係。メンバーの達弥に気に入られたようだが・・・男が駄目な舞輝はどうするの？

(前書き)

これは、苺タルトが妄想で書いたものなので、事実とは全然違うことを書いてるに違いないのでご了承を。
妄想の世界ではなんでもありますから（笑）
名前や、劇団とかの名前も架空のものです！

いつもさみのそばに・・・

第一章 キズナ

いつもの朝・・・

いつもの街・・・

いつもの通学路・・・

いつもの教室・・・

毎日変わることのない学校生活。

私生活。

街の匂い。

赤い電車。

買い物弁当のコンビニ。

淡々と過ぎ行く時間。

友達と居てもつまらないとか、決してそうじゃない。

ただ・・・

なんとなく、退屈なんだ。

そして、いつもの・・・

「おまよーー聞いて聞いてー・ビックニースーー」

朝からハイテンションなのは、元気娘“愛海”アリ。

「おはよ、どうしたの？」

いつも聞き役、しつかり者の“千春”。

「おはあ・・・・」

某歌劇団の雑誌を見ながら、無愛想な返事をしたのは、“暁子”。

「うはのお・・・・」

こちらも無愛想、朝から牛丼を食べているのは、この物語の主人公である「舞輝」。

いつもの仲間・・・は、高校2年生。

「そんで? 何よ、ビックリコースつて。」

千春が聞いた。

「それがねえ~。」

愛海は、ニヤニヤしながらカバンから一枚の紙を取り出して、

「じゃあん! こないだ、S-Wingの番組に送ったうかうのダンスが、なんと! 決勝大会まで残りましたあ!」

と言つて、満足気に机にと届いた通知を置いた。
その通知を見て、

「えー————つ？」

と、3人は声を上げた。

「ま、まさか・・・」

暁子が言つと、愛海はニヤツと笑つて

「生 *s - wi n* ただよーねえ、みんな行くよね？」

愛海の問いに、3人一斉に答えた。

暁子 「行くつー。」

千春 「あたしは・・・」

舞輝 「バス」

「・・・」

しばらく沈黙が流れた。

そして、愛海は何故か舞輝の胸ぐらを掴み、

「何で行かないって言つの（怒）行くって言こなさいよおおおおお

！」

と言つて、舞輝をブンブン振つた。

「く、くふひい～・・・はなひて～・・・」

舞輝は、食べた吉牛を吐きそだつた。

それでも愛海は、「ええええええええ～」と、続ける。

「わかつた！わかつたから！行きます。」

と、舞輝は言った。

すると、さつきまでの怒り狂った愛海の顔が、一いつ瞬となり、

「わかればいいのよ。舞輝も行くって、こうなつたら4人で行かな
いとね。」

と言った。

千春は舞輝と同様、渋々OKしたのだった。

いつもの教室・・・
いつもの仲間・・・

今日は、舞輝にとつていつもより新鮮な朝だった。

早速、放課後からダンスの練習は始まった。
愛海は、若干、スバルタである。
テレビに映るとなれば仕方ないだろう。

「覚えてないなんて言わせないわよっー」

こんな調子。

舞輝は、少しだけ参加して、ダンススタジオに向った。

いつもの放課後・・・

舞輝は、ダンススタジオに通っている。

まもなくミュージカルのオーディションと、有名劇団の入団試験を控えて、ほぼ毎日通っているのだ。

本当なら収録に行つてる場合じやない舞輝だが、

「最近、付き合い悪いぞ！」

と、愛海がむくれていた。

それに、ダンス漬けのほぼ1週間。

気晴らしになると思い、参加にOKしたのだ。

入団試験の倍率は20倍と言われている。

先生もかなり力が入つていた。

何枚あつても足りないレオタード、シューズ。

もう、何足トウ・シューズを駄目にしたとか・・・。

そして足には肉刺^{まき}。

一方、愛海の方は、帰宅して振り付けの見直しと調整をしていた。

愛海は、ダンス部部長。

文化祭や、地域のお祭り等に参加して、よく振り付けをする。

舞輝ほどダンス歴はないが、歌と踊りが大好きである。

これが、大ファンのs-winingの前で踊るとなれば、愛海の振り付けにも熱が入る。

最初で最後の大舞台！なんとしても成功させたい。

いろんな構成を考えながら、振り付けの調整は深夜まで続いた。

愛海が考えて考えて練つた構成は、ダンス経験者の舞輝や自分と違つて千春と暁子はほとんど経験がない。

覚えるスピード、技術的にも限界がある。

それを本人達はわかっているから、自ら後ろに引っ込み、踊りが小

さくなつてしまつ。

前後が平等になるよう動きを入れ、2人が前にきてもフレッシュヤーにならないような振り付けを考えた。

愛海の良くしようと思つ気持ちが、ひと波乱を起しあつとは思いもしなかつた。

翌日。

舞輝が委員会で練習に遅れて行くと、

「もうあたしやんないつ！」

暁子の怒鳴る声がした。

慌てて教室に入ると、真っ赤な顔した暁子と、泣いている愛海、困り果てた千春がいた。

緊迫したムードの中、

「どーしたの？」

舞輝は千春に聞いた。

「それが・・・」

千春が事情を話さうとするが、

「愛海は自分が目立ちたいだけなのよ。あたしや千春が踊れないからって、ソロなんか入れちゃって。」

暁子は目に涙をいっぱいに溜めて言った。

愛海はただ泣くばかり。

「とつあえずや、座つて落ひに着ひ。」

舞輝は暁子を、千春は愛海を椅子に座らせ、舞輝達も座つた。
舞輝は、愛海の振り付けノートを取り皿を通して。

沈黙する教室・・・

舞輝は一通り皿を通して終えると、

「愛海、云えなきやいけなことは、ちやんと云えないとわからな
いよ。」

舞輝は言つた。

「ねえ、暁子。」「
「何。」「
「もし、みんなにソロ入れたいって愛海が言つたらOKする?
「・・・多分しない。」

暁子は言つた。

「なんで?」

舞輝が聞くと、ムッとしたよう口を尖らせた。

「だつて、愛海や舞輝みたいに上手に踊れないもん。」

と言つた。

「じゃ、千春もやつと思ひへ。」

「うん。」

千春は言った。

「だからあえて2人で踊るようになつてんじやない。
何言つてんのかわからんないよ。」

暁子は言った。

「愛海はね、今までの前後の入れ替えばかりじゃつまらないから、構成をいろいろ考えたの。

一人一人が s - w i n g に見てもらえるようにソロを入れたかったんだけど、暁子や千春が嫌がるんじやないかって考えたの。だから、一人でもめーいつぱい見てもらえるように、一人の持ち時間の倍を使って二人で踊つてもらうことにした。

プレッシャーかけるようで悪いけど、一番見られる大事な役ね。ここで盛り上がり最後4人でサイコーのファイニッッシュになるわけ！

一人より二人なら乗り切ってくれるつて考えた結果なんだよ。

暁子が s - w i n g のこと大好きなのちゃんと考えて、ファイニッショは暁子と愛海が中央。あたしの見解は以上です。」

舞輝は軽くお辞儀をした。

「 そ う な の ？ 愛 海 。 」

暁子が聞いた。

「 う ん 。 」

愛海は小さい声で頷いた。

「そこまで考えていたとは思わなかつた。」

暁子は俯いて言つた。

「愛海はダンス部部長だよ？あたしなんかより振り付けや構成を考えるのは上手よね？」

舞輝は言つた。

「「じめん・・・愛海。」

「「ひん・・・私もじめん。」

愛海は言つた。

「千春も納得？」

「あたしはみんなと踊れればいいから。」

千春は微笑んだ。

「よしつー仲直り！」

舞輝に促されて、暁子と愛海は笑つて握手をして仲直りをした。

毎日、少しでも時間があれば練習をした。

愛海の熱心な特訓は、たまに喧嘩に発展するものの、舞輝と千春の仲裁に入り練習を続けた。

ある休日、4人は原宿に来ていた。

「あんまつお金かけるわけにいかないし。」

本番に着る衣装の相談。

「例えば、オソロだけど、色違いでTシャツ買つてスパンホールのヘアゴムでウエスト絞つたり、中にロンT着てもいいと想つ。両サイドに紐入れて絞つたり！」

暁子が案を出すと、一斉に拍手が沸いた。

「でも、今冬だよ……」「だつたら、メンズでロンT買えばいいんだよ！好きなように切っちゃえ！」

暁子は、じついう服のリメイクが得意である。なんでもお洒落に着こなす凄腕の持ち主。

「賛成！」

全員一致で竹下通りを物色し始めた。

いいのがみつかり、暁子の提案でそのまま暁子の家に行つてリメイクすることになった。

暁子の家は、同じ神奈川だが東京寄り。

お菓子やらジユースやら買い込んで暁子の家に行つた。

暁子の指導で買って来たロンTを破いたり、ミシンで縫つたり、それぞれのリメイク衣装が出来上がつた。

準備は着々と進み、あつといつ間に収録の日となつた。

収録当日。

舞輝は性格上、人は待つても待たせることはない、舞輝のルールに反する。「この日も、20分も前に到着していた。

吉牛でも行くかな・・・。

好物の吉牛を食べに歩き出すと、後ろからテンションの高い手呼び止められた。

「舞輝いー！おはよー！早いねえ。気合いははいつてんじゃん！」

「お、愛海です。

低血圧の舞輝にはついていけない。

「あんたが早いのはs-winn会える興奮から。どうせ、興奮して寝れなかつたんじやないの？あたしが早いのは、単にせつかちだから。あんたが一番知ってるでしょうが！」

舞輝は、言った。

「あははははあー。てか、楽しみだねえ」

愛海のあまりにも高いテンションに、一緒にいるのが恥ずかしくなった舞輝は、「牛丼食べ行ってくるから」と、愛海を置いて歩き出した。

「ええ！待つてよー！」

愛海は慌てて追いかけた。

この二人、中学のときからの親友。家も近い。

なのに、なぜか行きだけは一緒に行かないのだ。
付き合いが4年以上になるのに未だに謎である。

千春と暁子は時間通りに到着し、揃ってテレビ局へ向った。

控え室に案内されると、すでに到着して準備に取り掛かっている決勝大会の出場者達がいた。
リハーサルもあるということで、緊張の面持ちで愛海達も仕度を始めた。

第一章 出会い

その頃、すでに楽屋入りしているS-WINGの部屋では、台本に目を通し、決勝大会に残ったグループの投稿作品を再チェック。
これから愛海達のVTRを見るところだ。

「次は、ああ、女子高生チームだよ。俺推薦の。」

と、言つたのはリーダーの廉^{レン}。

「仲良し4人組だつて！」

資料を見ながら解説中なのは、茶田つ氣たつぶりの拓^{タク}。

「おつー・ピッヂピチだねえ～」

おつかれさん。おつかれさいのは、最年長の真人。

「なかなか揃つてていいじゃん！」

なんの個性もなく、いたつて普通の青年、達弥。

今、一番人気のアイドルの素顔。

「自己紹介文読むよ！前列右の子が、リーダーの愛海ちゃん。ダンス部部長だつて。後ろ右が、暁子ちゃんで、左が千春ちゃん。」

と、拓は読み上げた。すると廉が、

「ダンス経験ないんだろ？よく揃えてきたよ。」

と、感心。

「んで、Jのやたら動きのいい子は？」

真人が指差した。

「俺も気になるんだけど。」

達弥も言つた。

「Jの子は、舞輝ちゃん。ダンス暦10年。」

と、拓は説明。

「どーりでいい動きしてるわけだ。」

達弥は興味深々。

なんとなく気になる・・・ダンスがうまいからかもしれない。
でも、この急に湧いた胸の違和感が、この後しばらくぶりの感情となつて芽生える。

その頃、愛海達はリハーサルの順番一つ前になり、スタジオの端で待機していた。

前のグループのリハが終わると、愛海達が呼ばれた。
スタッフから細かな説明を聞く。

音出しの準備の間、各自ストレッチしたり、振りの練習をしたり・・・。

すると、最後にリハに入るs - winがスタジオ入りしてきた。
愛海達にいち早く気づいたのは、若い子大好き真人。

「噂の女子高生じゅん」

と言つて、愛海達に近づいていった。

誘導してきたスタッフが、

「s - winが入りマース！」

と言つたので、ディレクターやスタッフ達が一斉に、おはよひらいります！と声をかけた。

もちろん、愛海達はs - winを氣づいた。
生s - winで絶句の愛海と曉子。

そこにきて廉様スマイルで、「今日はよろしくね！」と、声をかけ
てきたのだ。

愛海と暁子は、今にも失神寸前で、

と、頭を下げた。

それを見て、廉はクスクと笑い、

「もつと肩の力抜いて。」

「やめじへ書つた。

「ねえ、この子動かないけど平氣か？」

拓がしゃがみこんで言った。

千春が慌てて舞輝の体を揺さぶった

「舞輝！・・・舞輝？・・・寝てる。」

千春が呆れて言った。

愛海が血相変えて、

「ああ～きこ～！起きたわ～！」

と、怒鳴つた。

すると、舞輝はムクつと起きて、

「ん？始まるの？」

と、言った。

「おはよー・ストレッチ、そんなに気持ちよかつたんだね！」

と、拓は話しかけた。

「・・・はあ。」

と、答えた舞輝に愛海は、

「まあって・・・まあ~じやないでしょ。」

と、怒鳴る。

そしてそれを千春がなだめる。
これがいつものパターンである。
怒る愛海を無視して、

「ねえ、これいつ終わるの？お腹空こひやつた。」

と、千春に聞いた。

すると、廉が、

「夕方からここまでかかぢゅうじゆつば。朝食べてこなかつたの？」

と、言つた。

「うのト、やつを牛丼屋で特盛食べてたよ・・・。」

と、呆れた愛海が言つた。

すると、今まで黙っていた達弥が「ふつー」と、吹き出した。舞輝は不愉快そうに、

「なんですか？」（怒）

と、達弥を睨んだ。

「「」めんー悪気はないんだよ。」

と、弁解。

「もうは思えません！」

舞輝はむくれて言った。

何、この人・・・初対面で笑うなんて。
失礼しちゃう。

ディレクターさんが「はじめまーす！」と、言って舞輝たちのリハーサルは始まった。

曲が始まつて踊り出す4人。

「あれ？ レベルアップしてないか？」

拓が言った。

「ああ。」

達弥はうわ言のような返事をした。
達弥は目が離れなくなつていた。

さつきなんとなく気になつてた舞輝に。

ストレッチしたまま寝て、無関心、無愛想な舞輝が、曲に入るとその世界に入つてしまつ。

いい顔しておどつてているのだ。

指先や、何から何まで神経が行き届いていて丁寧なダンスに魅力を感じてしまった。

キレイだ・・・。

4人はs - w i n gの歌のリハを見ることができた。

愛海と暁子は廉様に釘付け。

舞輝はs - w i n gをあまり知らない。

これを機にじつくり見とくかと、4人のダンスに見入つていた。

ルックス、歌、踊りと完璧な廉。

童顔な顔で軽快にブレイクダンスを踊る拓。

年を感じさせない真人のダンス。

特にかつこいいわけではない、サビをチョロつと歌うだけでなんのオーラも感じない達弥だけど、踊りがうまい。

群を抜いてうまかった。

体が柔らかいのだろう、ひとつひとつが確実なのだ。

すげ・・・。

舞輝の本心で出た言葉である。

そして、本番も無事に進行し、優勝は出来なかつたものの、“氣合い賞”をもらつことができた。誰よりも満足に違ひないのは愛海だ。収録後、愛海はとんでもない行動に出た。

「お疲れ様！」と、ゲストや出場者に声をかける「W.M.C.」
サインと握手をお願いしに行つたのだ。
愛海に気づいた廉が、

「お疲れ様、楽しかつた？」

と、話しかけてきた。

愛海は緊張しながらも、

「あの・・サインと握手してもらえたせんか？」

だめもとで聞いてみた。

祈るように返事を待つと、快く「ここのよー」と、言つてくれた。
そして、「やうだー」と愛海の耳元に近づき、

「」の後、一緒に食事でもしない？ 18時に＊＊＊つてお店で待つ
てるからみんなでおいでよ。」

と、言われたのだった。

「はーー」と、愛海は即答してペコっと頭を下げスタジオを出た。

テレビ局の前。

「」でわったあの件について話し合が始まつた。

「サインが食事こまでなるなんて・・・。」

と、千春は心配がついた。

「もう行へてしまへ？」

興奮気味の暁子が言った。愛海もノリノリだ。

「確かに、あたしたちこもあとでねつてこつてたけど・・・」

と、千春。

「行くだけ行つてみれば?」

と言つたのは、舞輝。

それでみんなも納得した。

「じゃあ、決まつたことであたしは帰るよ。」

と、駅に向つて歩き出した。
すると、腕を掴まれ、

「ダメよ。」

と、愛海が言つた。

「なんで? 行きたいのだけこつてきなよ。」

と、舞輝は言つた。

「みんなできつて、廉君が言つてたもん。」

むくれた顔で愛海は抗議した。

「あたし、舞輝がくるから賛成したの。この一人、かなり乗り気だから興奮してなにやらかすかわからない。アイドルの誘いだよ、の

このこついてつていいもんか・・・。だから、舞輝みたいに冷たい目でみれる人が付いていたほうがいいと思うの。」

と千春は言った。

横で、愛海と暁子が「そつだ！そつだ！」と、言ひ。

「あのさ・・・真剣な目で結構傷つくなと言つてるよね。」

と、むくれた。

「なんかあつたときに、冷静に行動できるの舞輝だから、あたしあちだけにしないで？ね！」

千春は真剣な目で懇願してきた。

若干、さつきの言葉が後味悪いが、友達思いの千春に胸を打たれ（？）

「わかった。行くよ。たくさんいたほうが安全だもんね。」

と、OKしたのだ。

3人は舞輝に「ありがとう！舞輝い！」と言つて抱きついた。

なんだかんだ付き合つてしまふんだな・・・あたし。

舞輝はちょっとため息交じりで微笑んだ。

まだ約束の時間まで余裕のあつた4人は、プリクラを撮つたりして時間を潰して、待ち合わせのお店へ行つた。

そこは、高そうなお店だった。高校生のお財布ではとても入れない・

・・4人は誰一人として前に進むことができなかつた。呆然としていると、店から廉が出てきた。

「なんだ、来てたんじゃん！入りなよ。」

と、迎え入れてくれた。

すると、千春前に出て、

「あたしたち、そんなにお金持つてないんです、今日はこれで失礼します。」

と、しつかりした口調で言つた。舞輝はさすが！と、心の中で拍手をしていた。

廉はにっこり笑つて

「誘つたのは」つちだから、」つそつするみー。」

と言つた。

安堵の4人は、お店に入つていいくとそこは綺麗な焼肉屋さん。座敷になつている個室に入ると、他のメンバーが「待つてたよー」と、迎えてくれた。

席に着き、廉が

「「めんな、俺の安易なひらめきで誘つちやつたから、緊張させたよな？」

と、謝つてきた。

「いえ！とんでもないです、嬉しかつたですか～。」

と、愛海は慌てて言った。

「安心してなー俺ら今夜は飲まないからさ。やれやれ注文しようか。

」

と、廉が言った。

ソフトドリンクで乾杯し、食事が始まった。

話しあは廉から切り出す。

「昔つから仲がいいの？」

廉の質問に答えるのはもちろん廉様命の愛海。

「高校に入つてからの親友です！」

「愛海ちゃんがムードメーカーだね！」得意の廉様スマイルで言った。

「そんなこと……」

愛海はテレながら言った。

愛海はふと視界に入った達弥のみつめる先を見た。

舞輝……。

黙々と食べ続ける舞輝をにこにこしながら見ているのだ。

「ちよつと、舞輝。わざから黙々と食べてるけど、話しあってきなさいよ（怒）」

愛海は言った。

舞輝は手を止める」となく、

「あんた、何年友達やつてんのよ。あたしが食べ始めたらしゃべんなこの知つてんでしょ。」

と、言い返した。

するといすかさず廉が、

「何年友達やつてんの？」

と、聞いてきたから愛海は舞輝に突っかかるのをやめて廉との会話をに戻った。

「やつとじ飯食べれたね！ おいしい？」

と、達弥が舞輝に話しかけた。

舞輝はやつさんの事をまだ根こもっていたのか、

「まつとこてください。」

冷たく返した。

愛海は「舞輝！」と睨んだが、シカト。

一方、冷たくされてもにこにこしている達弥。

達弥は舞輝に気があるーと愛海は思った。

食事も済んでひと段落したところで、廉が中庭に出ようと持ちかけ、みんなで出てみることにした。

舞輝はみんなと離れて、一階の中庭を一望できるベンチに腰掛けた。

舞輝は日本庭園や、寺を見たりするのが好きなのである。

廉と愛海が仲良く散歩している。

廉のお目にかかったとみた。

よかつたね、愛海。

ボケツとしていると、「隣、いいですか?」と、声をかけられた。振り返ると、達弥が立っていた。

断る理由もなかつた舞輝は、

「どうぞ。」

と答つた。

「つまらない?」

達弥は舞輝を見て言つた。

「つうん、つまんない。」

「そつか、ならいいんだ。一人でいるからつまらないのかと思つて。」

「

少し安心したような顔で言つた。

少しだけ沈黙があつた。

「あたしね、好きなの。風景が。寺巡りとか、海眺めるのとか。」

舞輝が話しだした。

「そつなんだ! よく出かけるの?」

「ダンスが忙しくてなかなか・・・だから、気使わないで、いつもこんなよ。愛海達もよくわかってる。戻つて。」

舞輝は言った。

「舞輝ちゃんがよければここに居たいんだけど、ダメ?」

と言つ。

達弥の予想もしない返答に舞輝は面食らつた。

「いいんですけど、物好きなんですね。」

と言つた。

達弥は苦笑いで、

「やうかも。」

と言つた。

「今度・・・一緒に連れてつてくれないか? 舞輝ちゃんの好きな場所。」

と、続けた。

「結構、軽いんですね。」

真顔で舞輝は言った。

「素直な気持ちはちゃんと言わないと。舞輝ちゃんにまた会いたいつて。」

「やつぱし物好き。」

舞輝は言った。

大人の男の人ってこんなもんなんのかしら？

舞輝は思った。

でも、舞輝の心臓は意味不明の速さで鼓動を打っていた。

結局舞輝は、達弥の押しに負けてケータイの番号とアドレスを交換したのだった。

体が冷えてきた二人は部屋に戻った。
お店を出て、この日は解散となつた。

帰り道、舞輝と愛海は家が近いことから、廉とのことを延々聞かさ
れるのだった。

第三章 挑戦

翌日、愛海が珍しく遅刻をしてきた。

「どうしたの？ 遅刻なんて珍しいじゃない。」

千春が心配そうに駆け寄った。

「うん、廉くんと朝まで電話してたの。」

欠伸をしながら机にカバンを置いた。

「ふうん」と、3人は言つて、「え――――――？」と、叫んだ。

「あたしたち、結構遅くまで話してたよね？あの後電話したってこと？帰れた……。」

と、舞輝が言った。

すると、愛海がニヤけて、

「舞輝だって、達弥さんといい感じのへせこ。」

と、言った。

わざわざいつも絶叫の千春と暁子。

「番号交換したんだって！」

愛海は続けた。

「ま、舞輝が？男の人に番号……。」

一番びっくりしているのは千春。

「そんで、メールきたの？」

愛海が聞いた。

「うん、無事に帰れたかつて。」

「それで？」

千春と暁子が机に身を乗り出して聞いてくる。

「帰れたから、おやすみなさいって返したけど。」

「それだけ？」愛海が聞くと、「うん。」と答える舞輝。千春と暁子は満足でないのか、「えーー」とブーイング。舞輝はちょっととイラつときて、

「だから、それだけ！って言つてるじゃん。」

と、答えた。

「つまんないメール。」

暁子がむくれて言った。

「いや、舞輝がメール返しただけでも違う！教えただけでも奇跡！」

と、千春が目を輝かせて言った。

「どーゆー意味よ？」

と、舞輝はむくれた。

「舞輝の人見知りは最強よ。」

と、千春は言った。

「これを機に男嫌いが治るといいね。」

と、愛海は言った。

「え、舞輝つて人見知りな上、男嫌いなの？かわいそう・・・。頑張れ！」

暁子が意味不明なエールを送った。

「（）心配ありがと（怒）」

舞輝は言った。

翌日から、舞輝は学校を休んでオーディションと入団試験のために稽古に励んだ。

達弥からのメールは頻繁にくるようになり、たわいもない内容のメ

ールは、舞輝の警戒心を解いていった。

もつとも、疲れて返事はままならなかつたが。

この週末は、ミュージカルのオーディション。歌、演技などの試験を受け、見事に合格し役をもらつことができた。次の週は、入団試験。

人気のあるTMC（東京ミュージカルカンパニー）という劇団。倍率も高く厳しい試験となつたが、なんとか合格できた。

この合格は、すなわち別れを意味する。

合格者は、TMA（東京ミュージカルアカデミー）で寮生活をしながら団員を目指しレッスンを受ける。舞輝は学校を止めなければならない。

愛海たちは、なんて言つかな・・・。

笑いの絶えない友達とて、何が退屈なんだうか・・・。

舞輝は、今の学校にうんざりしていた。

女子高とは、グループ社会。

必ずリーダー的存在と、その子を取り巻く仲間がいる。

なんの権限もないのに、自分の思い通りにならないことや、少しでも流行遅れの格好をすれば、たちまち彼女たちの悪口の対象となる。ダンスができるだけで言われたこと也有った。

愛海は持ち前の明るさで誰とでも仲良くなれて、ダンス部を立ち上げたのも愛海だ。

学祭で踊つたりしてみんなは知つてはいるが、舞輝のようじ、小さい頃から外で習つてやつてたりすると、ひょんなことから踊れるとわかると、「踊れるからつて」と、言われてしまつ。都合のいいときだけ「みんなで力合わせてやろうよー」と言つたり、かかわりたくないで避けると「お願ひ」と言つ。仕方なく引き受けついざ始まるど、「できる人はいいよねー」と言われる。

リーダーが言えれば、私達もそつなんだと自分の意思完全に無視状態。違うと言えば仲間はずれにされるから。こんな毎日に嫌気がさし、無駄な時間をダンスに使いたくて卒業まで待たずに入団試験を受け続けた。愛海達に不満があるわけじやない。ただ・・・このままがいやだつた。2回目にして受かつた自分の夢への第一歩。絶対に逃したくはない。

舞輝が学校に来なくなつて2週間が経つた。

週明けの昼休み。

「舞輝、来ないね。」

心配そうに千春が言った。

「連絡もとれないし、何やつてんだろ。」

愛海も続いた。

「家に行つてみた?」

暁子が愛海に聞いた。

「毎日は行かないんだけど、たまに寄ると、ダンス行つてるって。
「そつか、じやあ生きてるんだ!」

暁子はホッと肩をなでおろして言った。
千春がハツとして、

「まさか、あの時舞輝が男にメアド教えたのは奇跡だつて言って、
みんなで大騒ぎしたときのことだ怒つてたりして?」

途端に不安になつてきた千春。

「まさかあ!・・・かなあ?愛海いー

暁子まで不安になつてきた。

「違つと思つよ。もつとも、食べすぎで倒れてるんじゃないの?」

と、愛海は笑つて言った。

「誰が食べ過ぎだつて?」

聞き覚えのある声に3人は振り返ると、舞輝が立っていたのである。

相変わらず牛丼を持つて。

3人は「舞輝いー！」と、声をあげた。

舞輝はシカトして自分の席に座ると、吉牛の特盛を食べ始めた。

「ちょっと、久々に来てそれはないんじやない？今まで何してたのよー。」

と、愛海が言った。

「食べ過ぎて倒れてたの。」

舞輝は吉牛をほおばりながら言った。

「もつー！舞輝は。冗談に決まってるでしょ。」

愛海はむくれて言った。

「ちょっとね、ダンスに打ち込んでたの。オーディションがあつてさ。」

「やうだつたのーで、結果は？」

暁子が聞いた。

「合格。夏の公演に出る。」

舞輝は真顔でサインした。

「やつたじやんーおめでとうー。」

3人はとても喜んでくれた。

「ありがと。見に来てね。」

舞輝は言つて、それ以上は話さなかつた。

TMAのことはもう少し後に話そつ・・・。

牛丼を食べ終えた舞輝は、

「次、英語？あたし寝るね。」舞輝は机に伏せつてしまつた。すると、誰かのケータイが鳴り出した。

「うひやこ（怒）」

舞輝が言つて、愛海が「私だ！」と言つて、電話に出た。

【もしもし？愛海ちゃん？】

「もしもしーどうしたんですか？こんな時間に廉くんから電話してくるなんて。」

【今日、仕事で愛海ちゃん達の学校のそばまで来てたんだ。授業終わつたらドライブにでも行かない？】
「近くにいるんですか？」

愛海が聞くと、

【外みて「ひん】

愛海は猛ダッシュで廊下に出た。

すると堀に横付けしたワンボックスカーから廉が手を振つていた。

【学校終わったらみんなで出でることですよ。】

と、廉が言つと、愛海は

「おとでと出わす、今から行きます。」

と、言つて電話を切り教室に戻つて千春たちに小声で話しだした。

「ねえ、廉くんが着てるのー。ライブ行こうって、行こうよ。」

「え？ 今から？ 授業は？」

と、千春は聞いた。

「一分でも長くいたいじゃん」

と、愛海。

暁子は行く気満々で、すでに準備を始めていた。

愛海は舞輝にも同じことを話した。

すると舞輝は、

「こつこつしゃべ

と、寝ぼけた声で手を振つた。

「あなたもくるのー。（怒）

と、いつて愛海は舞輝を無理矢理引っ張つてつた。

「ちよっと（怒）まだきたばかりなんだけどー。」

と、舞輝は抵抗したが愛海は動じない。
引っ張られるまま廉の車に乗り込むのだった。
出発した車中で、廉は心配そうに、

「大丈夫なのか？出できちゃって。」

と、聞いた。

「はいーーひから結構優秀なんです、ねえ？舞輝。」

と、愛海は調子よく答えた。

舞輝はシカト。

「機嫌悪いの？」

と、達弥が心配そうに聞いてきた。

舞輝は

「（）こつが無理矢理…… % # & * @ ……」

言おうとして愛海はすかさず舞輝の口をふさいだ。

「寝起き悪いんですよ、気にしないでくださいね」と、答えた。

一時間のドライブで着いた所は海浜公園。
各自にバラけて散歩をしたり海で遊んだり。

舞輝は石段に腰をおろし海を眺めていた。

向こうで千春が「こっちおいでよ～！」と言っているのを手を振つて返す。

今日はとてもいい天氣で子ビも連れて散歩してたり、カップルがイヤついてたり。

冬の海は澄んでて空氣もおいしい。

寒くなければもっとといいのに！

舞輝は夏より冬の方が好きなのだ。

はたから見れば、ボオ～っとしてこるより見えるが、実はこすることで舞輝の心も頭もリセットされてこる。だから、風景が好きなのかもしれない。ほっぺたに温かいものが当たつた。

見上げると、達弥が「コアを持つて立つていた。

「横、いい？」

「どうぞ。」

舞輝は少しずれてあげた。

「ホントに好きなんだね！眺めているのが。」

「コアを渡しながら達弥は言った。

「うん、スッキリするの、頭も心もリセットされてるような気がして。いただきます。」

と言つてコアを一口飲んだ。

「あつたかい。」

舞輝はこんなにおいしいもんかと思つた。

視線を感じて横を見ると、達弥が微笑んでいた。

舞輝はパツと顔を正面に戻した。

ヤダ・・・何、顔熱くなつてんの？

向こうでは、何やら鬼ごっこが始まつていた。みんなキャツキャツ言いながら走り回つている。

「ねえ、ホントにあたしの」とは気になくていいから行つて？」

舞輝は言つた。

「俺はここにいたいから居るんだけど。」

「ふーん。」

舞輝は少し温くなつて飲みやすくなつたココアをグイッと飲んだ。

「なんで、あたしなの？つまりなこじやない、無口で無愛想で。」

舞輝が言つと、達弥は笑い出した。

「ホントはもつと笑えるんじやないの？笑つたらきつとかわいいと思つただけど。」

と言つた。

「ナンパですか？」

舞輝は眉間にシワを寄せて言った。

「ナンパじゃないよ、舞輝ちゃんが気になつて仕方ないんだよ。」

達弥の言葉に舞輝はドキッとした。

「多分・・・好きなんだよ、舞輝ちゃんの」。

達弥は舞輝をまっすぐ見て言った。

いきなりすがて言葉がなにも出でこなかつた。

「で、でも、こないだ会つたばつかで番号聞いてくるし、今日は何言に出すかと思えば好きとか言つし。ナンパだよー。」

舞輝はむくれて反抗した。

「やうだよな。でも、俺は真剣なんだけど。返事はいつでもこよ。

」

達弥は言った。

突然の達弥からの告白に状況がまつたくつかめない。

何?好きって。

何?時間かけてって・・・。

返事いつでもいいって・・・。

「ねえ、あたし夢があるの。その夢叶えたいの。だから、いつにわかるかわからない。」

舞輝はパニクリつてゐる中、精一杯言葉を探して達弥に言った。

「それでも待つ。夢を邪魔するつもりはないよ、頑張ってね！でも
さ、『デートくら』はしてくれる？」

達弥の笑みは優しく、舞輝の胸はドキドキしていた。

「ううしょ・・・あたし！――！」

その後も達弥からは献身的なメールが毎日届いた。
舞輝の心はグラついていた・・・

恐怖と生まれ変わりたい自分と・・・

第四章 旅立ち・新たな挑戦

あつという間に高校2年生も終了。
そして、舞輝の高校生活も最後なのだ。
結局舞輝は3人に話すことができなかつた。
修了式が終わり、教室に帰りみんなでおしゃべりをしていた。
今日の舞輝はよく笑つていた。
千春や暁子は気づいていないが、愛海だけは舞輝の異変に気づいていた。

「舞輝、よく笑つてるね？なんかあつた？」

愛海は舞輝に聞いてみた。しかし、舞輝は「そり?」と、答えただけだった。

「始めるぞーー！」

担任が入ってきてHRが始まった。

新年度の話し、成績表の配布、先生からの最後の挨拶があった。

「最後に、もう一人挨拶する人がいる。」

担任は舞輝を前に呼んだ。

席を立ち前へ向う舞輝。

愛海は、「舞輝?」と、不安げに声をかけたが、舞輝はニッとも笑うだけ。

「秦野だが、今日で学校を辞めることになった。」

担任の言葉に3人は驚き立ち上がった。

担任は辞める事情を説明した。

舞輝がみんなに挨拶して席に戻ると、3人が舞輝をみていた。

愛海はすでに泣きそうである。

「後で話すから。」

舞輝は言つて、3人を前へ向かせた。

放課後・・・静まり返った教室で舞輝はみんなに今までのことを話した。

3人は黙つて舞輝の話しを聞いていた。全て話し終えると、

「何も黙つてなくたつていいじゃない（怒）」

愛海は猛抗議してきた。

「ごめん。もうすぐお別れだねつて、そんな話しあしたくなくて。
「あたしは応援するよー。寂しくなつちやうけど、友達辞めるわけじ
やないんだし。」

千春は笑顔で言つてくれた。

「それにさあ、あのＴＭCの予科生でしょ？あんな有名な劇団に入
つたなんて鼻高いしー！」

暁子が言つた。

二人とも、あえて精一杯明るく振舞つた。
愛海が一番寂しいのを知つてゐるからだ。
「ありがと。」舞輝は、一人に言つた。

「愛海、愛海はなんかないの？舞輝が一番応援して欲しいのは、愛
海なんじゃない？」

愛海の背中を擦りながら千春が言つた。
愛海はグショグショになつた顔を上げて、

「舞台があるとき呼んでよね。」

「うん。」

「連絡してこなかつたら許さないんだから。
「うん、わかつた。必ずする。」

舞輝は言つと、また愛海は俯いてしまつた。

「愛海？」

「ん？」

「ありがとー！」

舞輝が笑つていた。

「うん、頑張つてね！」

愛海は言つたのだった。

帰りの電車の中。

「ねえ、舞輝。」

「ん？」

「達弥さんつてこのこと・・・」

「知らないよ。愛海達に言わないで達弥さんこの言つと黙つへー。」

舞輝は言つた。

その通りである。舞輝はそういう子だ。

「思つたんだけど、達弥さんつて舞輝のこと好きなんだと思つ。」「知つてゐる。」

意外な舞輝の返答に愛海はびっくりした。

「知つてゐるつて？」

「海にドライブ行つたときに言われた。」

「ホント? 返事は? してないよね・・・」

舞輝が言つわけがない。

「言つてない。」

「達弥さんなら、大丈夫だと思う。ネガティブに考えないで進んでみてもいいと思う。誰でもいいってわけじゃないんだよ、でも、いい機会だし・・・」

「愛海、ありがと。心配してくれてるんでしょ？俊太のこと。」

愛海の言葉を遮つて舞輝は言つた。

「・・・うん。」

「もう、俊太のことは平氣だよ。たださ・・・」

「同じことを繰り返すのが怖い。」

「うん、そう。」

舞輝はため息をついてシートに寄りかかった。

“俊太”とは、舞輝の前の彼。

すごく仲が良かつた二人は、クラス公認のカッ普ルだつた。しかし、俊太の裏切りは舞輝の心を深く傷つけた。

それが、舞輝のトラウマ。

達弥の気持ちは嫌じゃなかつた。

初めての印象はともかく、まっすぐ見てくる瞳は引き込まれそうになる。

ドキッとするたびに、なんかの間違いだと言い聞かせてきた。それに・・・

今は、優先したいことがある。

愛海は舞輝の今の気持ちを知つて、少しづつでも舞輝が変わつてつ

てくれるならそれもありだと思った。

時間をかけて舞輝が達弥さんに心を許してくれたら・・・

舞輝が劇団の寮に入るまでのわずかな時間で、4人は旅行に行つたり遊びに行つてプリクラをたくさん撮つた。

そして、舞輝はみんなに見送られて東京へ出発した。

これから始まる2年間は、劇団に入るまでの予科生として勉強をする。

1年目は寮生活、2年目は、通学となる。

寮は学校からすぐのところにある。

部屋は2人部屋だが、広く作られている。

一間に勉強机と2段ベッドがある。

ルームメイトは、年上だが同期。

人見知りする舞輝だが、共通の仲間であるからすぐになじむことができた。

夏に出る舞台のデモテープも届き、普段の稽古とは別に個人レンレンを受け、準備を整えた。

こうして舞輝のように、授業を受けながら外の舞台に出て経験を積む者もいれば、そうでない者もいて、割と自由である。

毎日が楽しかった。

好きな踊りが出来て、演技の勉強が出来て。

達弥とのメールも続いていた。

寮に入つてから学校を辞め、今の劇団の予科生になったことを知らせた。

初めはビックリしていたが、舞輝の話を聞いて、舞輝の夢を応援

すると言つてくれた。

6月からは授業を休んで出演する舞台の稽古に入った。

初めてのことばかりで無我夢中だった。

顔合わせや、台本読み、歌のレコードティング。

パンフの写真撮りも、顔だけじゃなく、衣装を身に付けた全身写真

だつたり。

緊張の連続だつた。

発表会には何度も出でているから、場当たりやゲネプロは難なくこなせた。

初日を迎えるまであつという間だった。

初日。

地方公演から始まり、残り千秋楽を含む1ヶ月に及ぶメインステージは東京。

幕が上がり、舞輝の初舞台の幕も上がつた。

メインの東京公演を迎えるまでに、舞輝はドンドン成長をしていった。

それは他の出演者の誰が見てもわかる成長ぶりだった。

メインステージの東京。

ここでのステージも中盤を迎えていた。

今日は昼の公演のみ。

愛海達が来てくれることになつていてる。

舞輝のメイクにも力が入る。

公演が終わつたら食事に行くことになつていた。

愛海達と久々の再会、胸は高まるばかりである。

開場したロビーでは、愛海、千春、暁子の3人が集まっていた。
「お待たせ！」入り口から手を上げてこちらに向つてくるのは、廉と達弥だ。

愛海がこいつそり呼んでいたのだ。

「間に合つてよかつた！パンフ買ったの、席で見よつよ！」

愛海はみんなを引き連れて客席に向つた。

全員着席して、パンフを一枚一枚めぐつていく。

「あ、舞輝！」と、愛海が指した。

そこには、今までに見たことのない舞輝が写つていた。

衣装を身に着けた舞輝。

素顔の舞輝。

愛海の知つているホントの舞輝がいた。

一緒に見ていた達弥も声には出さないが驚いていた。

やつぱり、笑つたほうがかわいいじゃないか。

びっくりするのはこれからである。

舞台を観にきたのだから当たり前だが、舞輝が歌つて、踊つて、演技をしている。

いつも教室にいたあの時の舞輝じゃない。

こんな生き生きした舞輝を誰も見たことがなかつたのだ。

カーテンコールでは、出演者に声援を送る者がいた。

愛海たちも舞輝に声援を送つと話し合つた。

そして、舞輝が出てくると、すごい声援が上がつた。

圧倒されながらも、愛海たちも精一杯の声を出して舞輝を呼んだ。

客席に手を振る舞輝。

愛海たちにも気づいて大きく手を振った。

終演後、愛海たちが向うのは楽屋。

そこには既に出来待ちをする人でごった返していた。

搔き分けて入り口に向うと、「誰の知り合いだろ?」と、羨ましそうに見られていた。

途中、廉に気づき少しざわついたが、なんとか楽屋口に入り回避した。

愛海が受付で舞輝を呼んでもらつと、5分くらいして舞輝が出てきた。

「舞輝いー！」

3人が駆け寄り抱きついた。

「みんな来てくれてありがとー！」

舞輝も一緒になって飛び跳ねた。

「これ、あたし達から。」
と、千春は花束を渡した。

「ありがとー！嬉しい」

はしゃいでいると、舞輝の視界に達弥の姿が入った。
舞輝は愛海の方を見ると、

「驚かそうと思って、内緒で呼んじやつた。」

「お疲れ様! すい」と口を出しながら言った。

「お疲れ様! すい」によかったよー」

と廉が言った。

「あつがとつじれこまか。」

舞輝は頭を下げた。

「これ、俺達から!」

達弥は花束を舞輝に渡した。

「嬉しいです。びっくりしました、一緒に来てるって聞いてなかつたんで。」

舞輝は言った。

「愛海ちりやんりじこねー。」

廉は笑つて言った。

「ひとなとこで長話もなんだから、『J飯行いつよ』

と、愛海が言った。

「じや、支度してくるよ。」

舞輝は楽屋に戻つていった。

「舞輝が明るくなつてゐる・・・。」

暁子は言つた。

「あれがホントの舞輝なのかもよ?」

千春は暁子に言つた。

「咲はもっと笑つてたよ。舞輝は。」

愛海が思つて出でよひに言つた。

「やうなんだ、まだまだ知らない」とがたくさんあるんだね、あたしたち。」

千春が言つた。

達弥も同じこと思つていていた。

30分ほどで支度を済ませ、他の出演者に挨拶をして楽屋を出た。愛海たけと楽屋口から出ると、「舞輝ちゃんが出てきた!」と大騒ぎ。

握手・サイン・写真と求められ、エレベーターに乗り込むまで30分もかかつてしまつた。

それでも笑顔で応える舞輝。

エレベーターの扉がしまつた途端、全員で「はあ~」と疲れ果てていた。

「「」めんね~、時間がかかぢやつて。」

と、舞輝は言った。

「こつもは出待ちしてて立場だけじ、出演者の気持ちが分かつた気がする。」

暁子が言った。

「俺達も捉まつちやうといふこんなもんだよな？」

廉が達弥に振った。

「ナハだよ。気こすることないよー。」

達弥が言った。

向つたといは、愛海と廉のお勧めのレストラン。

食事をしながら、近況報告などで盛り上がった。

一段落したところで愛海が動き出した。

「あつ、あたしこれから用あるんだよね。悪いけど帰るねー。」

と、愛海は言い出した。すると、「あたしも。」と言つて、千春や暁子まで支度を始めた。

舞輝も一緒に帰つと席を立つと、

「舞輝はまだいなよ。せつかく達弥さんに久々に会えたんだからー。」と愛海が言って舞輝を座らせた。

「でもあ・・・」と、舞輝は言ったが、愛海たちが「じやあーねえ」と、帰つてしまつた。

廉も駅まで送りつくると並んで行ってしまった。

「なにも、みんなして帰らなくたって。」

舞輝はむくれて言った。

すると、達弥はクスッと笑った。

「はめられたかな。」

「はめられた?」

舞輝は首をかしげた。

「わざわざ一人にしてくれたんだよ。廉も一緒になつて。」

と、達弥は言った。

「なるほどね。だから落ち着きがなかつたのか。」

舞輝は納得した。

急に一人つきりこなれて何話していいかわからず、

「無理やり連れてこられたんじゃないですか? だったらごめんなさい。」

舞輝は謝った。

「なんで謝るんだよ、愛海ちゃんから聞いて俺から頼んだんだよ。」

達弥は言った。

「それならいいんですけど。」

「まあ、それで廉と今回のこととを仕組んだんだがつな。」

達弥は笑つた。

「まったく愛海は。」

舞輝は呟いたのだった。

余計緊張すんじやない！

第五章 恋

舞輝と達弥は店を出て少し歩くことにした。

外はもう真っ暗だ。

しばらく黙つたまま歩いた。

隣に舞輝がいる。

たつた数ヶ月なのに、随分大人っぽくなつた。いつもメールしてゐるのに、何を話したらいいか言葉を搜した。

「今度、デートしてくれる？って聞いたの覚えてる？」

達弥は言つた。

「うん。覚えてる。」

「また、海行こりよ。」

「うん。じゃ、この舞台終わつたら。」

「やつだね、落ち着いたら行こう。」

達弥は言った。

少し歩くつもりが、そのまま駅に行ってしまった。

舞輝は、千秋楽が終わったら連絡すると言つて達弥と別れた。

「デート……か。」

「デートなんてどんな感じしてないだろ？」

もう、しないとthoughtた。

まだ17なのに……！

無事に千秋楽を終えることができた舞輝。

それは一生心に残るものとなつた。

しばらくぶりの授業は、みんなも夏休み明け。

それでも、溜まつた一般教養の宿題などの遅れを取り戻すのに大忙しだつた。

仲間に助けられ、なんとか終わることができたのだった。

このせいで、なかなか連絡できなかつた達弥にメールをした。

すると、すぐに達弥から着信がきた。

ちょうどお互いに空いている時間が合い、明日会うことになつた。

時間と、待ち合わせ場所を決めて電話を切つた。

ちょっと楽しみだなつと思つた心躍る舞輝なのでした。

授業を終え、寮に帰る支度をしていた。

「なあ、さつきの振り納得いかないんだ、付き合つてくれないか？」

と、声をかけてきたのは、同期の早瀬翔。

翔の入寮の日に、荷物に足を引っ掛けで舞輝とぶつかったのがきっかけで話すようになった。

「じめん、これから約束があるの。一度寮に帰るんだ！」

と、舞輝は言った。

「そつか。じゃ、俺も帰るか。」

と、支度を始めた。

「他あたりなよ。」

舞輝は言った。

「いや、秦野が一番やりやすいからさ。」

「ダメじやん。なんの稽古にもなりやしない。」

舞輝は翔をつついてやった。

「まあな。」

翔と舞輝はスタジオを出た。

寮まで数分のため上着を羽織るだけ。

二人は寮のエントランスで別れ部屋に戻った。

舞輝は急いでシャワーを浴び、着ていく服を選んだ。
「」つ見えて女の子である。

普段はまったくしないメイクも少ししてみた。

部屋を飛び出しホントリーンスに向づ。

女子寮の入り口を出たところで翔とぶつかった。

「ひつ」

「うわひ」

ぶつかって倒れたのは翔だった。

「いつてえ～・・・」

「早瀬くん、」めん、急いでたかい。」

舞輝は手を差し出した。

「ああ、いいよ。たいしたことないから。ホントよべぶつかるよ
なあ・・・」

翔は舞輝の手を借りて立ち上がった。

「急いでんだろ? 行け・・・」

言いかけて止まつてしまつた。

「ん?」

舞輝は言った。

「お前、いつもと違‘うじやん。」

「そお？あつ、電車！行くね！」

舞輝は寮を飛び出していった。

翔は舞輝が出て行ったエントランスをみつまたまま動かなかつた。

なんとか5分前には待ち合わせ場所に到着できて達弥も同時に到着した。

「じめん、待たせた？」

「いえ、私も今着たとこです。」

「行こうか！」

舞輝は達弥の後についていった。

無人運転の電車に乗つて、海浜公園のある駅で降りた。

「久しぶりに来た！」

舞輝は嬉しそうに言つた。

「花火持つてきたんだ、暗くなつたらやう。」

達弥がカバンから花火セツトを出して見せてくれた。

「いいですね！やりましょ‘う！」

「もう少ししないと暗くならないかな。先ご飯食べる？」

「はい。」

二人は、近くのイタリアンレストランに入った。

達弥のお勧めでコースにすることになり、好きなパスタとジュース

を選んだ。

「なんか、いつもと違つ感じがするね？」

と、達弥が言った。

「ちうですか？時間があつたから化粧してみたんです。」

嘘ばつか！

舞輝は思いながら言った。

「いーこと思ひよー。」

達弥はこつこり笑つて言った。

舞輝は照れを隠すように俯いて「どうも。」と言つた。

そういうしていると、前菜が運ばれてきた。

舞輝は一口食べると、「おいひい～」と言つて皿を輝かせ、あつと

いつ間に皿をしてしまつた。

舞輝はハツとした。

しまつた・・・」コース料理だつた。

達弥の視線を感じ、達弥の方を見ると、口をつむぎを見ていた。

「あたしつたら、また黙々と・・・」

舞輝が言つと、

「いいんだよー。やつこつこじがー。」

と、達弥は言った。

「そうですか？ 食い意地ばつかで・・・」

照れ隠しを言った。

「最近の若い子ってあんまり食べないだろ？ 偏食だし。おいしいもんを幸せそうに食べる子って貴重だと思うんだ。」

「達弥さんって、結構おじさんですよね。」

舞輝は笑つていった。

「失礼だな。」

「言つてることが古い人みたいだもん。」

舞輝はケラケラ笑つてている。

「まあ、いいや。舞輝ちゃんが笑つてゐるし。おじさんはよく食べる子が好きなんだ。」

達弥はふざけて言った。

舞輝はさらに爆笑し、腹をかかえている。

達弥は少し嬉しくなった。

「笑つよくなつたね。」

達弥が嬉しそうに言つた。

「確かに、昔より笑うようになったかも。」

「TMCのアカデミーの入ったからだね。」

「うん。全部愛海たちのおかげ。受かったこと言えずに修了式になつちゃったの。それでも怒らないで背中押してくれた。それには、志しが同じ仲間に出会えて毎日楽しいの。」

と、舞輝は語った。

「よかつたね！笑ってる方がいいよ、舞輝ちゃんは。こないだの舞台でみんな感動してたよ。」

と、達弥は言った。

「ありがとう。」

食事が済む頃、外は暗くなつていた。一人は海浜公園に戻り、持つてきた花火を始めた。

「キレイ！」舞輝がはしゃいでいる。

17歳とは思えないくらい大人びてる舞輝。

花火しているときは、普通の17歳の女の子だった。

無邪気な17歳を隠す何かがあるんだ……？

昔、笑えなくなつちゃうくらいの過去があつたの……？

舞輝ちゃんをもつと知りたい……

花火はあつという間になくなり、一人は待ち合わせした駅に戻ることにした。

達弥は、あまり遅くまで連れまわしたくなかったからここで別れることにした。

「今日は」駆走様でした。」「

舞輝は、楽しかったことを伝えた。

「俺も、楽しかった。来ててくれてありがとう。また連絡するよ。」「
おやすみなさい。」

舞輝はペコリと頭を下げ歩き出した。

もう少し一緒にいたかったかも・・・。

舞輝は少し名残惜しい気持ちでいた。

すると、突然腕を掴まれ舞輝は振り返ると、そこには達弥がいた。達弥は、無意識に歩き出す舞輝を追いかけ腕を掴んでいた。

「達弥さん・・・。」

舞輝はびっくりして言った。

「『めん・・・。まだ一緒にいたいって思つたら体が勝手に。何してんだろうな、俺。』

「私はまだ大丈夫なので、かまいませんよ。」

「いや、ダメだよ。今日は帰るつ。」

達弥はグッと堪えて言つたのだった。

帰りの電車。

舞輝は、達弥の行動に自分を大事に想つてくれていることを感じていた。

無理して紳士的にならなくていいの……。眞面目なんだかい。

この恋を進展させるには、自分にある“トライアスマ”を活用していく
からいけない……。

舞輝は思つのだつた。

途中から雨が降り出した。

舞輝は、シイでないわと思つながら、駅からダッシュを考えていた。
改札をぐるぐると、翔が立つていた。

「早瀬くん。」

舞輝の声に気づき、

「おかえり。」

翔は言つた。

「ただいま。何してるので？』

舞輝は聞いた。

「秦野を迎えて着たんだよ。雨が降ってきたから。」

と言つて、傘を持ち上げて見せた。

あたしを迎えて……？

「ありがと。待つたんじゃない？」

「そもそもねえよ。ただな、一つしか持つてきていんだけ。慌てて
出てきたから。」

優しい奴。

舞輝は少し胸がキュンとした。

この世はまだまだ捨てたもんじゃないかも。

「一緒に入ればいいじゃない。」

舞輝の言葉に少しポツとなり、

「そうだな、行くか。」

思つたより雨脚が多く、一つの傘ではあまり役にたたなかつた。

「若い女がこんな時間まで遊んでるみな。」

と、翔は言った。

「早く返してくれたの。あたしは別に平氣だつたんだけど。」

「男か・・・やつぱし。」

「うん。高校のときに知り合つた友達。」

「そつか。」

「なんで?」

「だつて、いつもよりお洒落してたからさ。好きな奴なんじゃないかなつて思つて。」

「うん。・・・好きな人かもね。でも、そんなんにお洒落してた?」

舞輝は聞いた。

「うふ。 した。」

しばらく黙つたまま歩いた。

小さいビニール傘に一人。

翔は舞輝の方に手を回し自分に弓き寄せた。

「濡れるぞ。」

照れくさかつた翔は、すぐに手を離してしまった。

「早瀬くんもね。」

「翔でいいよ。」

「じゃ、舞輝でいいよ。」

「ああ。」

寮に着き、翔は、

「よく温まれよ、また明日な。」

と言つて、男子寮に帰つていつた。

「ありがとね！迎えにきてくれて。」

舞輝は言った。

翔は手だけ振つて答えた。

舞輝も部屋に戻り、達弥にメールをすると、すぐに返事が着た。

『今日は楽しかつた！また遊ぼうな！』

舞輝は、また誘つてくださいと返事を送つた。

明日も早い舞輝はシャワーを浴び、ベッドに入るとすぐに靴元へ飛びこつぐのだった。

シャワーを浴びて出てきた達弥はケータイに入つてメールをチエックした。

『また誘つてくださいーおやすみなさい。』

自然に顔がほころびる。

いつもしてまた人を好きになることができた。

3年前・・・達弥には同じ年の彼女がいた。

彼女がホントに好きだった。

でも、ちょうどs-winnとしてデビューが決まって忙しくなつていた頃で、彼女に寂しい想いをさせてしまったのか、高校卒業と同時に振られてしまった。

なかなか彼女との別れを受け入れられず、達弥は自分から人を好きになることができなくなつっていた。

芸能界へ入つて、誰かの紹介や告白されて付き合つたりしていたが、寂しさを埋めることはできなかつた。

舞輝との出会いは、運命だと思つた。

こんなに惹かれて、愛おしいと思える。
しばらくぶりの感覚だった。

「たつちゃんお兄。」

「何?」

「ちょっとコンビニ行ってくる。」

「今から?車出すよ。」

「悪いよ、疲れてるんだし。」

「今日は休みだから。行くぞ」

「うん。」

達弥は車のキーを持つて従兄弟と家をでた。
それが事件を呼ぶとは誰も思わなかつた・・・

しばらくの間、達弥と舞輝の予定が合わず、会うことが出来なかつた。

そつこひこむつこひこ、初舞台となつた作品の冬公演の出演が決

まつた。

年明けから、また前回の役を務める。

今回は翔や、アカデミーの仲間も駆けつけてくれることになつてゐる。

いつもの授業が終わり、寮に帰ると「聞いてよー」と、先に帰つて
いたルームメイトの恵美が雑誌を持つてきた。

『S - Wing 達弥！タレントと熱愛発覚！』

達弥と、女性がコンビニからでてくるとこを撮られたらしく。
隣に写つてゐるのは舞輝じやない。

チクチク・・・

なんだる、胸が痛い・・・。

舞輝はしばらく外に出でた。

頭の中を整理するためだ。

考えてみれば、なんであたしなんだろう？

ただの口リコンだつたとか・・・芸能人だからいろんな子に手を出
すとか・・・。

ボオーッとしていると、達弥から着信が入つた。
出るのにためらつてしまつたが出てみることにした。

何か言い訳がしたいのかもしれない。

「ハイ・・・

【もしもし。舞輝ちゃん？元気してた？】

何事もない態度だつた。

元気してるわけないでしょ。

「・・・・・・・・・・・・」

【舞輝ちゃん？】

いつもと変わらない達弥に腹が立つた。

「何よ・・・・・」

言葉が涙で詰まつた。

【どーした？今どこ？行くよ。】

「来ないで・・・あたし、自分に腹立つてきたの。人気アイドルの
一人が私みたいな一般人となんて遊びだつて気づけなかつたのが。」

震える声で精一杯話した。

【読んだのか?】

「・・・・・。」

【あれは、違うんだ! 会つて話そう! どうして元気? 寮か?】
「来ないでっ! もう、かけてこないで・・・。」

舞輝から一方的に切つてしまつた。

涙が止まらなかつた。

次から次へと溢れてくる。

「舞輝?」後ろから声がした。

翔である。

見られたくなくて何も答えず俯いていると、翔はしゃがんで下から覗き込んだ。

黙つて舞輝だと確認すると、隣に座つて頭をナデナデして自分の胸に引き寄せた。

黙つて舞輝が落ち着くまでずっとそばにいた。

鳴り続ける着信。

“達弥さん”と表示されている。

なんかあつたな・・・。

しばらくすると、エッグエッグといった舞輝が落ち着きを取り戻して翔から離れた。

「翔、ごめんね、ありがと。」

「ああ。電話鳴つてたけどいいのか?」

「うん。」

「俺が口出す」とじやないけど、ちゃんと話して貰へよ。思い違いだつてあるかもしねないだろ?」

「もう、いいの。」

「舞輝……。」

「ちょっと浮かれてたかも。彼女気分だつたんだよね、きっと。」

舞輝は無理に笑つてみせた。

「翔、ありがと。部屋に戻るね。」

舞輝は立ち上がりつて部屋に戻つていった。
引き止めて、「俺にしろよ」って言つたかった。
でも、翔にはできなかつた。

くそつ、泣いてる舞輝なんてみたくねえ。

部屋に戻つてからも、達弥と愛海からとひつきりなしにかけてくる。
舞輝は電源ごと切つてしまつた。
それから1週間してからだらうか、愛海の電話に出たのは。
愛海がいくら違う、達弥が好きなのは舞輝だからと言つても聞く耳
をもたなかつた。

冬公演の稽古に入り、気が紛れたのが幸いだつた。
友達も増えた。

お稽古のあとみんなでお茶したり、食事に行つたり。
達弥のことは忘れていられた。

達弥と連絡を絶つてから1ヶ月が過ぎた。
達弥からもかかつてこなくなつた。

それでも、毎日が充実していた。

公演は始まっていたからだ。

やはり、舞台に立っているときは楽しくて仕方がない。

今日は、愛海が来る日。

愛海のことだから、達弥さんにも声をかけただけ。

来るわけないよね・・・。

翔たちも同じ時間の公演に来ることになっていたからメイクに力が入つてしまつた。

トントン・・・

「どうぞ。」

「失礼しまーす。秦野舞輝さんにお花です。」

「『苦勞様!』

冬公演始まつてから、毎日届く同じ花束。

カードに“頑張つてください。応援しています。”とだけ書かれて
いる。

誰だろ？

アドリブも冴え、何事もなく終演し、楽屋に戻つて部屋着になつた。お茶を飲んでると、スタッフがアカデミーの人々が来ていると伝えに来てくれた。

礼を言つて舞輝は楽屋口に向つた。

ドアを開け、ひょっこり顔を出すと、翔たちが舞輝に気づき手を振つた。

「みんなー！」と、舞輝が駆け寄ると、ちゅうど、愛海と達弥が楽

屋口に入ってきた。

舞輝が他の面会者と話しているので端っこで待つこととした。
愛海は今回は呼ぶつもりがなかつたが、達弥の方から直々に頼まれて一緒にきたのだ。

仲直りには、会つて話すのが一番である。

向ひでは、舞輝と他の面会者が楽しげに話している。

「舞輝、お前サイ」「ー！」

と、言つて抱きつゝ男がいた。

「わかつたから、離して翔（怒）」

舞輝も楽しそうである。

「ねえ、買ひに行きたい物があるんだ。あとで舞輝ちゃんと駅前の喫茶店にいくてくれないか？」

と達弥が急に言ひだした。

「え？ 今から？」

「舞輝ちゃんに渡したい物があつて。」

「わかつた。じゃ、後で。」

愛海が言つと、楽屋口から出てしまつた。

ありや、ヤキモチ妬いてるな（笑）

舞輝が愛海に氣づき手を振つてきた。

「『めん、友達待ってるからさ、そろそろ』。」

と言つて出入り口まで見送つた。

「舞輝、飯でも食いに行こうぜー。」

翔が言つた。

「友達と約束あるから、帰つたら連絡するよー。食堂で飯食おつ（笑）

「なんだよ、食堂つて。」

翔はむくれた。

「いいから行くぞー。」

聰太が翔を無理やり引きずりだした。

「じゃあ～ねえ～

舞輝は笑つて見送ると、愛海のほうへ行つた。

「おまたせえ～、いつ来たの？」
「さつき！先に支度してきちゃいなよー待つてるから。お茶しよ。」

「わかった。先に行つてもいいよ？」

「じゃ、さつする。駅前の喫茶店わかる？そこそこあるね。」

愛海は楽屋口から出て行つた。

急いで支度をして駅前の喫茶店に行つた。

愛海が一人で座つて紅茶を飲んでゐる。

「お待たせ！」

舞輝も紅茶を買つて席についた。

「お疲れ様！今日もよかつたよー。」

「ホント？嬉しけな。」

「うん、生き生きしてゐる。初めはあつちに行つたりやけりの嫌だつたけど、今は行かせてもよかつたつて思つてゐる。」

「ありがと。」

舞輝は愛海にそう言われるのが一番嬉しけのである。

「ねえ、達弥さんとはまだなつてゐるの？」

そうくると想つていた。

「連絡取つてない・・・。」

愛海はため息をついた。

「舞輝、あなたの気持ちわかるけど、これじゃこつまでも経つても前に進まないじゃなー。」

「いいよ、もう。」

舞輝は紅茶を一口飲んだ。

「よべなによ。」

聞こ覚えのある声に後ろを振り返ると、達弥が立っていた。

「達弥さん・・・。」

「達弥さん遅いー・舞輝、あたし帰るから、ちやんと仲直りするんだよ、いい?」

と叫びて愛海は席を立つた。

「え? 帰つやがつの?」

「一人で話しかけたほうがいいよ。」

「ありがと、愛海ちゃん。」

「一人のためなら全然です。」

愛海は「一ートを羽織、店を出た。

頑張れ、舞輝!』

「なんでもいいの?」

舞輝は叫んだ。

「愛海ちゃんに頼んでセッティングしてもらつたんだ。はい、これ。

「

達弥は花束を渡した。

「これ・・・。」

楽屋に毎日くる花束。

「少しでも舞輝ちゃんと繋がっていたくて。」

達弥は俯いて言った。

達弥の言葉に、胸がキュンとなつた。

「・・・ありがとう。」

舞輝と達弥は、ぎこちない感じのまま席にひついた。

「「」ねん、傷つけて。」

達弥は頭を下げて謝った。

今回のことを初めから話した。

「私もすみません。ちゃんと話しあう聞かずにはしまつて。

「いや、ちゃんと話さなかつた俺がいけないんだ。嫌われても仕方ないと思つてた。でも、ちゃんと話しがしたかつたんだ。」

「私は・・・そう思えなかつたことが恥ずかしいです。」

「そんなことないよ。」

読者には、簡単に説明しよう。

タレントとよく歩いている情報をキャッチした記者は、達弥をマンションの前でいつも張つていた。

マンションから出でてくる女性はタレントで、達也の部屋を出入りしているのは確か。

しかし、そのタレントは達弥の従兄弟だつた。

ファンに家まで押しかけてこられて、従兄弟である達弥のところ、新しい部屋を見つけるまで居候しているのだそつだ。

でも、またファンが押しかけてこないよう従兄弟とは未だ公表し

ていないのでそうだ。

「やつだつたんですか・・・『めんなさい、何も知らないで。』

舞輝は謝った。

「いいんだ。舞輝ちゃんにもあの時は話すことができなかつたから。メンバーですら知らなかつたんだ。」

「今はいいんですか？」

「いや、ホントは・・・いい部屋がなかなか見つからいらしくんだ。そんなことより、舞輝ちゃんにあの時ちゃんと話していたらつて、ずっと後悔していた。」

達弥は肩を落として言つた。

「やっぱ、嫌いにならないで・・・すげえシライよ。」

達弥の目はとても悲しそうだつた。
少しだけ沈黙が流れた。

「次・・・」

「え？」

「次、いつ食事にいきます？」

舞輝は笑顔で言つた。

「舞輝ちゃん」

「仲直り。」

舞輝は手を出した。

「仲直りー。」

達弥はしつかり舞輝の手を取つて握手した。
帰つて愛海に電話で報告したら安心していた。
「人騒がせねー！」つて。

翔にも、お礼言わなきゃ。

翔にエントランスにでてきてもうつた。

「『じめん、急に呼び出しへ。』
『いいよ、どした？話し合つたか？』

こないだのことを『氣にして』くれていて
舞輝は仲直りしたこと話をした。

「よかつたじやん。」

「うん、翔の『氣』とおり、思い違ひだつた。ありがとねー。」

舞輝は微笑んでこる。

ちよつと悔しいけど、泣いてる舞輝を見るくらになら他の誰かのこ
とで笑つていってくれたほうがいい・・・。

「舞輝は笑つてなきや 舞輝じやないよ。」

舞輝は照れ笑いをした。

「翔に逢つまでは笑つ」とあんまりなかつた。」

「なんでだよ？」

「いろいろあってね。」

「そつか。」

それ以上聞かなかつた。

「舞輝、飯食つた？」

「あつ、食べてない・・・・」

舞輝のお腹がグウ～と鳴つた。
思わず一人で吹き出してしまつた。

「行こ～うぜー。」

「うん。」

二人は食堂に行つておいしそうに飯にありつけた。
あとで聰太も合流した。

「お前ら相変わらずよく食うな。」

お皿こつぱいに盛つた飯に一人の食いつぶりを見て呆れてこる。

「食つ子は育つー。」

翔は言つた。

「寝る子だよ・・・・」

舞輝が突つ込む。

「お前ら、こいコンビだ。」

「サンキュー」

二人は口を揃えて言った。

あまりの息の合いかたに聰太は苦笑いするしかなかつた。

第六章 三人の想い

3月。

舞輝は、愛海たちの卒業を祝うために高校へやつてきた。
1年ぶりの学校。

門では卒業生とその親で賑わっていた。
門をくぐり、愛海たちを探した。

キヨロキヨロしていると、後ろから「わっ！」と、驚かされた。
びっくりして振り返ると、愛海たちが「一ヤリ」と笑つて立つていた。

「もひ、びっくりするじやん！みんなおめでとひー。」

と言つて愛海たちに抱きついた。

最寄の駅前のファーストフード店で4人でお祝いをした。
愛海は大学に、千春は専門へ、暁子は就職が決まつていた。
ホントの意味で、みんな別れ別れ違う道へ進む。

「舞輝もあと1年だねー。」

千春が言つた。

「そうだね、みんなも頑張つてねー！」

舞輝は言った。

この春から、舞輝は予科生の2年。

新入生が入ってくるので、寮を出なくてはならない。

翔は田舎から出てきており、遠方からや、事情があつて仕送りが少ない者だけが寮に残れる。

舞輝家は、ちょっととしたお金持ち。

実家から通うこともできたが、無理を言つてアカデミーの近くに部屋を借りてもらつたのだ。

新居も決まって、引越しをするだけ。

初舞台の作品で、夏の新作の出演が決まっていて、出先は好調だ。

引越しの日。

近所のスーパーから借りてきた台車を使って翔に手伝つてもらい、寮から、数分歩いたところにある新居に荷物を運ぶ。

一つ台車を押して、先に鍵を開けにマンションに向つた。

舞輝の住むマンションの隣でも、引越しのかトラックが停まつていた。

ここも引越ししか。

春だねえ。

すると、トラックの方から「舞輝ちゃん?」と、声がした。

トラックを見ると、真人（S-WINの最年長若い子大好き）がひょっこり顔を出して手を振つていた。

「ほんにちがは。」

舞輝は軽く会釈した。

「おう、手伝いに来たの？」

「なんですか？」

「違うの？」

「違います。」

「おーーー達弥！舞輝ちゃんがいるぞ。」

真人が叫ぶと、ドタつと音がして、その後達弥がすっ飛んでやつていきた。

「やあ！何してんの？こんなところで。」

「どこの間にぶつけたのか、笑つていいけど痛そうである。」

「私も引越しなんです。」

「そつなんだ！台車で運ぶつてことは、この辺？」

「はい、ここです。」

「ん？どこの？」

「ここです。」

舞輝は指を指した。

達弥と真人は舞輝の指差す方へ目を向けた。

「ここって・・・ここへ。」

「そうです。」

達弥が引っ越してきたマンションのとなりのマンションだった。すると、舞輝より重い台車を押して汗びっしょりの翔が到着して、「鍵あけたかあ？」と、叫んでいる。

「『めん、まだー！』

と、叫び、

「行きますね。」

と言つてマンションに入つていった。

みんなバイトやレッスンで手伝えないため、翔と一人だけ。達弥は少し嫌な気分だった。

鍵を開け、外に戻ってきた舞輝と楽しそうに運び込んでいる。

「ライバル登場だな。」

真人が言つた。

「そうみたい。」

と、言つた。

舞輝が部屋の窓を開けると、向かいのマンションのベランダがある。ちょうど出てきた達弥と目が合つた。

「達弥さん！」

「舞輝ちゃん？」

お互に吹き出しあつた。

「よろしくね、お向かいさん」

「よろしくねー！」

舞輝も笑つて言つた。

「あつ、翔。紹介するね、一いちら達弥さん。アカデミーの同期の翔

です。」「舞輝も笑つて言つた。

舞輝に紹介され、黙つたまま頭を下げる一人。

「誰もいなくて手伝つてもらつてゐるんです。」

「そ、うなんだ。『苦勞様。』

達弥は言つた。

「いえ、舞輝の頼みなら」んなの楽勝です。」

翔は言つた。

達弥は苦笑いをした。

「言つてくれたらトラック出したのに!」

「そんな荷物なかつたんで。忙しいんだが!」

「舞輝、早く運んじゃおうぜ。」

舞輝の手を掴んで外に連れ出した。

「なんか、怒つてる?」

舞輝は聞いた。

「別に・・・知り合い?」

「前に話した、私の好きな人。」

翔は舞輝に背を向けたまま、

「よかつたな。いつでもあえるじゃん。」

と言つた。

「そだね。」

舞輝は笑つて言つた。

全ての荷物を運び込み、一人は食事をしに外に出た。
ちゅうど達弥たちも出てきてばつたり会つた。

「お疲れ!終わつた?」

と、達弥は聞いた。

「はい。終わりました。」

「俺達これから飯行くけど、一緒にいり?」

「ああ、翔どうする?」

舞輝は翔に聞いた。

「どつちでもいいよ。」
「翔くんがよければ。」

達弥は余裕の笑顔を見せてきた。

翔も、恋敵に余裕の顔をして見せて、

「じゃ、一緒にいきます。」

言った。

向った先は、焼肉屋。

飲み物だけ選んで、達弥たちにお任せした。

「あれ？ ジュースでいいの？」

達弥が聞いた。

「俺、まだ18つですから。」

「そりだつたんだ！」 めん。

「いや、別に……。」

翔は言った。

翔は舞輝の耳元に近づき、小声で

「なあ、この人たちってさ、まさか s - w i n ばっかないよな？」

と、聞いた。

「うん、そだよ。」

舞輝はあっさり答えた。

「なんで知り合いなんだよー。」

「今度話してあげる。」

飲み物が運ばれてきてた。全員グラスを持つと、「じゃ、お疲れー。」

と言つて乾杯した。

野菜や、肉も運ばれてきて、舞輝の田は輝きたした。

「ほんとだー、うれしいー。……」

目を輝かす一人に達弥は「ふつ」と吹き出した。

「またあー（怒）」

舞輝がむくれた。

「これが見たくて舞輝ちゃんを食事に誘うんだ。」

達弥は言った。

それを聞いた翔は

— 3食とも一緒に食べさせて、舞輝はポンとこつもくもそろそろ食べ

対抗してみた。

۱۷۷

全然食へてない！恋しくしてす
毎朝あわか曰誤だよた

舞輝は肉をほお張り、「あいひい！」と言つた。

なんだか対抗するのに疲れた翔は一緒になつて話しの輪に入つていつた。

達弥も翔を悪い印象を持つてないし、翔も達弥を嫌いにはなれなか

つた。

舞輝が好きな人だからな・・・。

「せういえば、廉さんと、拓さんは？」

舞輝が言つた。

「廉は愛海ちゃんとデートだつて。」

達弥はビールを飲んだ。

「つまくいってるみたいですね！」

「廉が結構押したからな。」

真人は言つた。

「押さなくて、愛海なら口口ッといつたでしょー。」

舞輝は笑つて言つた。

ひととおりデザートまでしかつり食べ終えた4人は食事をお開きにし、店を出た。

真人は駅に向かうと言つて別れた。

翔は、コンビニに寄ると言つて途中で別れた。

二人で家に向かつて歩いていつた。

別れ道はお互いのマンションの前。

「誘つてくれてありがとうございました。」

舞輝は礼を言つた。

「翔くんに悪いことしちゃったかな。」

「なんで?」

「知らない人と交じって食事をするって、結構悪い使いだろ?それに・・・」

「それに?」

「舞輝ちゃん一人で食べたかったんじゃないかなって。邪魔しちやつた。」

達弥は肩を落として言った。

「つちら、そんな関係じゃないですよ。」

「舞輝ちゃんはそう思つても、翔くんはどうかな。」

「・・・考えたことなかつた。」

舞輝は俯いて言った。

達弥は舞輝を抱き寄せた。

ドキン・・・

「好きになつちやつたりしないでね。」

達弥は舞輝を強く抱きしめた。

「え?」

「俺より翔くんと一緒にいる時間長いだろ?俺は毎日メールもできないし、引越しすることすら知らなかつた。もつと俺を頼つてよ。」

舞輝の胸の鼓動が早くなつていた。

「返事はまだもらえない?」

達弥が言った。

好きだけど・・・好きだけど・・・

「「めんなさい・・・あたし達弥さんのこと好きだ。でも・・・」

舞輝は言った。

「でも?」

意外な返答に達弥は驚いた。

「怖いんです。」

「怖い?」

「達弥さんのこと、好きです。でも、好き以上を超えるのが怖いんです。」

そう言つて舞輝は小走りに部屋に帰ってしまった。

「舞輝ちゃん!」

どういう意味だ?つ?
何が怖いのか?・・・。

舞輝は部屋に入り、玄関に座り込んでしまつた。

男の人の温もり?・・・久しぶりだ。

達弥さんの言葉や、温もり、心臓の音・・・匂い。

全部に反応しちゃう。

なかなかドキドキが止まらない。

苦しいよ・・・。

せっかく舞輝と近くになれたといつのこと、収録や、ライブで帰ることができなかつた。しかし、舞輝とのメールは今聞くをぬつてかかなかつた。

いつもと変わらない舞輝からのメール。

舞輝はあまり自分のこと話れない・・・。

メールうらながらため息。

「こりいろ大変そうだな。」

「廉。まあな。」

廉が控え室に入ると、ケータイを見つめたままめ息つく達弥がいた。

「誰にだつて過去はあるよ。達弥にだつてあるだろ?」

「ああ。」

「達弥が忘れさせいやればいいと思つ。時間かかっても。舞輝ちゃんがお前を過去から引きずりだしたよ。」

「ああ。」

「ライバルもいるんだつてな?」

「真人か? あのおしゃべり。」

「ハハハ! いいじやねえか。一難をつてまた一難。頑張れよ、俺は

応援してんだぜ二人を。」「

「サンキュー。」

廉もおかげで気持ちが軽くなつたような気がした。

やつとできた休みで舞輝と会つことになつた。
待ち合わせは夕方17時、新宿駅改札。
達弥は少し早めに着いていた。
それが思わぬとこを目撃することになる。

舞輝も午後から新宿に来ていた。
使い古したトウ・シユーズの買い替えに翔と来ていた。
達弥との待ち合わせの時間に合わせ、舞輝は駅に戻つてきた。

「これから用があるの。先帰つて?」

舞輝は言った。

翔は察しがついたようで、

「あの人と?」

達弥のことである。

いくら、嫌いじゃなくても恋敵。
気に入らなかつた。

「うん。じゃあ、また明日ね!」

舞輝は歩き出した。

翔の足は自然と舞輝を追いかけていた。

まだ付き合っていないんだよな、一人は。

今日のデートで付き合うことになるかもしない。

嫌だ・・・俺だって舞輝が・・・

「舞輝！」

舞輝の腕を掴み、振り返った舞輝にキスをした。

“舞輝”と呼ぶ声が聞こえ、達弥は呼ぶ方を探した。舞輝と翔がキスをしているのが目に飛び込んできた。舞輝は、翔から無理やり離れて頬を引っ叩いた。

「いつてえ。」

翔は頬を押さえ言つた。

「いつてえじゃないわよーいきなり何すんのよ。」

舞輝は怒鳴つた。

「好きだからだよ・・・。」

「え？」

「好きなんだよー舞輝のことが。」

翔は言つた。

「だからって、いきなりキスなんかしないでしょ？バカつー！」

舞輝は走つて行つてしまつた。

走り去っていく舞輝を見ながら、「くそったれ」と言いつてその場に立ち去くした。

その場面を見ていた達弥は、舞輝を追いかけていった。

駅の外にあるベンチでうずくまって泣いてた。

達弥は自販機でココアを買って舞輝のいるベンチに座った。

「はい、ビーザ。」

舞輝にココアを渡した。

「達弥さん・・・」

「言つたら? 舞輝ちゃんは思つてなくとも、翔くんはびりだるつてい。

「

缶コーヒーを一口飲んだ。

「怒つてる? あたしや翔のこと」

「怒つてないよ。でも、すげえ悔しい。こんなキモチは初めてだよ。」

「

達弥は悲しい顔で舞輝を見た。

“ズキン・・”

わかる気がする・・・あたしもそおだつた・・・
翔のバカ・・・

「でも、ちゃんと仲直りするんだぞ。大事な友達なんだろ?」
「ん。」

舞輝が落ちつくるを待つて、この日は帰ることにした。
久しぶりに舞輝ちゃんの笑顔がみれると思つたのに、とんだハプニングだ。

達弥は思い、肩をおとすのだった。

第七章 特別な友情・舞輝のトラウマ

翌日。

廊下で翔とすれ違つた。
舞輝と目が合つた翔が「おはよ、舞輝。」と声をかけたが、舞輝は目を反らして行つてしまつた。
一緒にいた聰太は、

「おじおじ、どうしたんだよ？ 暖暉でもしたのか？」

と、聞いた。

翔は昨日の出来事を話した。

「そりやあ、怒るよ！ 強引すぎ。」

と、聰太に言われてますます凹んでしまつた。
自分と違つて、達弥の方が大人で包容力がある。
舞輝にすりや自分なんてお子様かもしれない。
だから余計に達弥の存在が悔しかつた。
強引にキスしたことは、今は後悔している。

でも、俺だつて舞輝のこと誰にも取られたくないんだ。

舞輝の踊りは、丁寧で綺麗だ。

初めて授業で舞輝を見たとき一目惚れをした。

初めは無愛想だった舞輝も、時間が経つにつれて笑うようになった。一緒にいて楽しかった。

「はい、セカンド。」

音楽が流れ出す。

踊りだす翔。

でも、舞輝が視界に入ると集中できない。すると、重心を崩して倒れてしまつた。

「いつてえ~」

舞輝がすぐに飛んできて、

「大丈夫? ねえ、翔を医務室に運ぶから手を貸して。」

舞輝が素早く指示して、聰太と舞輝と仲間で抱えて医務室に向かつた。

「ごめん、迷惑かけて。」

「集中しないで考え方してるからよ。」

「ごめん・・・」

医務室に着き、翔をベッドに座らせるとい

「あとは、あたしが先生を呼びに行くから、授業戻つて。ありがと。」

「

と、舞輝は仲間に言った。

「先生呼びに行つてくるから、おとなしくしてね。」

舞輝は医務室を出ようとすると、「舞輝。」翔が言った。
舞輝が振り返ると、

「昨日は、『めん。』

舞輝は黙つていた。

「舞輝にシカトされたら、俺どうかなつちゃいそうだよ。」

「あたし、翔のこと大好きだよ。でも、友達として。」

舞輝は言つた。

「親友にね、愛海つているんだけど、翔といると、その子といふみたいで楽しいの。あたし、愛海がいないと笑えなかつたの。いろいろあつて。

その愛海からも離れてここにきて正直不安だった。でも、翔と出会つて、毎日が楽しくて、気づいたらこの不安がどうかいつちゃつてて。

翔は私の大事な友達なの。嫌いになんかなれないし、怪我したらほつとけない。」

「友達か・・・」

翔は笑つて呟いた。

「でも、俺は舞輝にとつて友達でも特別なら嬉しいよ。」

と、翔は言った。

舞輝は翔の前にしゃがみ、昨日叩いた頬に手を当てた。

「痛かつたでしょ？ 叩いてごめんね。」

翔は横に首を振り舞輝の手に触れた。

「俺、初めての授業で舞輝に一日惚れしたんだ。踊りが丁寧で綺麗で。」

「ありがとう。」

「一緒に組むようになつてから、毎日好きになつてつて。」

「ん。」

舞輝は頷いた。

「・・・フラれるんだよな？」

「・・・ごめん。」

舞輝は悲しそうな目で言った。

舞輝にこんな顔させちゃいけない、翔は思つた。

「ごめん、そんな顔すんなよ。俺、笑つた舞輝が好きなんだ。昨日、あんな」としちゃつたけど、これからも友達してくれるか？」

翔は聞いた。

「うん。大事な友達だから。」

舞輝は微笑んだ。

舞輝は、医務室の先生を呼んできて、翔の足を診てもらつた。

幸い軽い捻挫ですみ、2ヶ月後の卒業公演の配役オーディションに間に合いそだとう。

舞輝も翔もホッとした。

授業を終えた仲間が荷物を持ってくれたので、仲間に翔を送るようになつた。舞輝も早々帰つた。

ベランダに出て、お向かいさんの窓を長い棒で突いた。すると、達弥が出てきて、「お帰り。」と、言つた。

「ただいまー翔と仲直りしたよ。」

舞輝は嬉しそうに言つた。

「よかつたなーねえ、昨日のやつ直ししないか?」
「飯でも食いに行
こひ。
「はーー。」

舞輝はシャワーを浴びに部屋に戻つた。

支度を済ませて外に出ると、達弥が車を出して待つていた。

「おまたせ。
「待つてないよ。じうぞ。」

達弥は助手席のドアを開けた。

「失礼します。」

舞輝は助手席に座つた。

「どう行ひつか?」

達弥は車を発進させた。

「達弥さんにおまかせします。あつ、『ご飯が食べたい！』
「お米ね。和食でいい？」
「いいですね！」
「じゃ、決定！」

達弥たちは、近くにある和食のレストランに入つて食事をした。
舞輝は、翔と仲直りした詳細を話した。

「舞輝ちゃんにとって翔くんは愛海ちゃんみたいな存在か・・・。

達弥は言った。

「アカデミーに入つてルームメイト以外で初めて友達になったのが
翔なの。翔が入寮の日、転んで倒れてきた翔の下敷きになって。な
んとなく笑いのツボ一緒だし、気が合つ。」
「そつか。羨ましいよ、翔くんが。」

達弥は言った。

「あたしたちって、そんなに遠い仲ですか？」
「俺にはまだ舞輝ちゃんのこと知らな過ぎるような気がする。」「
翔だつて知らない。」
「毎日いれば、俺以上に舞輝ちゃんを知ってるよ。舞輝ちゃんがど
んなことで笑つて、稽古場でどんな感じの舞輝ちゃんがいるのか、
俺は知らない。」

達弥の言葉に舞輝は黙ってしまった。

「さうだよな、田常のあたしを毎日見てるのは翔だ。

「昔・・・なんかあつた?」の前、怖いって・・・

達弥は言った。

「あ・・・。」

そんな」と言つたつけ。

「ごめん、話せないならいいんだ。」「

傷つくるのが怖いんです。」

舞輝は小さな声で言った。

「え?」

「昔、付き合っていた彼に裏切られちゃって。」「

「それがアリウマになつた。」

舞輝は頷いた。

「もうあんな思いしたくないの。」「

「何があつた?」

達弥の問いにそれ以上舞輝は答えなかつた。

廉を通じて愛海に会つて聞いてみた。

「「あんなさい、あたしの口からは言えないです。」

と言われてしまつた。

何があつたんだろう・・・？

「舞輝ちゃんになにがしてあげられるだい？」

達弥は肩を落として言つた。

「今は、いつもどおりに舞輝のそばに居てあげてください。時間がかかるけど、舞輝は立ち直ろうとしています。舞輝はあれで素直で優しい子だから、傷つきやすい子なんです。」

と、愛海は言つた。

夏の舞台が終わり、卒業公演のオーディションも終わり配役も決まつた。

お芝居では、女子の主役に抜擢。

ダンスショーでは、メインダンサーチームに翔と共にに入った。しかも、バレエの古典と、モダンで翔と組む。

しばらく達弥ともベランダでしか会えない。

それならと、達弥は椅子を買っててくれた。お互い時間のあるときにはベランダで話そうと用意してくれたのだ。

苦手なHIP-HOPの演目は夜の公演に行き、達弥に指導してもらつた。

達弥はs-winのバックダンサー。

実は歌も上手だが、ダンスはべらぼう上手い。

12月。

明日はイヴだというのに稽古があった。

達弥にX'masプレゼントを買いにきた。

舞輝はあまり得意でない。

「舞輝いー！」

改札から出てきたのは愛海。

プレゼント選びに向き合ってもらうのだ。

「久しぶり。」

舞輝は愛海に手を振った。

「ホントに久しぶりだね！元気してた？」

二人は歩き出した。

いろいろお店を物色していると、かわいいTシャツをみつけた。急遽、翔に卒業公演の成功を願つてお揃いで買った。

しかし、達弥に送るプレゼントがなかなか決まらなかつた。

親の仕送りで生活をしている舞輝には、買うものにも限界があった。でも、ちゃんとしたものをプレゼントしたかった。

愛海とブラブラとしている、帽子が目に入った。

達弥に似合いそうなキャップ。

値は少し張つたが、絶対に似合つと確信した舞輝は即決で買つてしまつた。

愛海は廉に手編みのマフラーをあげると言つて、ラッピングの材料を買つていた。

歩き疲れた二人は、カフェに入った。

「よかつたね、いいのみつかって。」

「うん、何あげたらいいかわからなくて困った。付き合つてくれてありがとう。」

愛海は一口紅茶を飲んで一息つくと、

「ねえ、もう少し肩の力抜いていいと思う。達弥さんに寄りかかっていいと思うな。」

と、言った。

「何? 急に。」

「達弥さん、凄く気にしてたよ、舞輝に何があつたんだろうって。」

舞輝は俯いた。

「達弥さんのこと好きなんでしょう?」

「うん。」

「頑張りなよ。達弥さんはしつかり舞輝を受け止めてくれる人だから。舞輝のトラウマなんか達弥さんが無くしてくれる。」

愛海は微笑んで言った。

「ありがとう。」

舞輝はウルツときたのを堪えて言った。

次の日。

稽古場に行くと、翔はもう来ていた。

「メリクリ！」

舞輝は持ってきたTシャツを翔に渡した。

「俺に？」

包みを開けると、舞輝が着ているTシャツと同じのが入っていた。

「卒業公演の成功祈つて！」

舞輝が笑顔で言うと、翔は舞輝に抱きつき、「お前サイコーーサンキュー。」と言って、早速Tシャツを着た。

他の仲間にはX, mas仕様のチョコを渡した。

大好きな舞輝にもらつたおそろいのT・シャツのおかげで稽古にも熱が入り、二人の息はピッタシだつた。

昼間の休憩でうちに帰つたら連絡くださいと、達弥にメールを入れておいた。

夜、そんなに遅くない時間に着信が入つた。

お互いベランダに出て「メリークリスマス！」と言つた。

舞輝がプレゼントを渡すと、達弥は嬉しそうに包みを開けた。入つていた帽子に感激し、かぶつて見せてくれた。

想像通りよく似合つていた。

「似合います。」

舞輝は笑顔で言った。

達弥もプレゼント用意していた。

中身はオルゴール。

小さなバレリーナがアチチュードをして回る。
奏でる音はくるみ割り人形。

「ありがとうございます！」

嬉しそうにオルゴールを見る舞輝を見て、達弥は嬉しかった。
舞輝は部屋に戻ると、オルゴールをテーブルにおいて何回も回した。
達弥のことを考えながら。

気づいたらそのまま眠りについてしまった。

年も明け、三元日を実家でゆっくり過ごし、帰つてすぐ稽古が始まつた。

残り2ヶ月を通し稽古でかためる。
翔との自主練も欠かさず、着々と準備を整えていった。

愛海や、千春・暁子・廉に、達弥・拓・真人も来てくれることになつている。

中退してまで入ったこの劇団。

愛海達には半端なものは見せられない。

公演前日。

稽古を終え、翔と練習して、元担ぎに大好きな牛丼で夕食を済ませて帰ると。翔は冷える手に息を吹きかけながら、

「いよいよ明日だな。」

と言つた。

「うん、後はよく眠るだけ。」

「おれ、舞輝と組めて嬉しいよ。ずっと組めたらなって思ったから。」

「あたしも嬉しいよ。翔のリフトは女の子思いだから、みんな組みたいはずよ。」

「ううかな、舞輝だからだよ。」

舞輝は笑つた。

「いや、ホントにー。」

翔は言つた。

「やうなの？じやあ、他の女の子にも優しくして？」

分かれ道。

「家まで送らなくていいのか？」

「いいよ、早く帰つてゆつくり休んで。」

「ああ、舞輝もな。」

「うん。」

二人は家に向かつて歩き出した。

舞輝は足を止めて振り返り、「翔！」と、呼んだ。

翔は振り返ると、走つてきた舞輝に抱きつかれキスをされた。

翔の顔は真つ赤になつてびっくりして目を見開いた、舞輝の唇の感触・・・。

翔はゆっくり目を閉じ舞輝を強く抱きしめた。
舞輝は翔から離れ「やっぱこれだ。」と言つた。

「え？」

「モダンの FOREVER LOVE。」

「ああ・・・」

なんだ・・・。

「何が足りないかずっと考えていたの。これですっきりした。明日だけ許してあげる。」

「限定の恋人か・・・。」

残念。自分に振り向いてくれたのかと思つた。

「私も翔のこと好きになる。最高のパートナーだから最高の一曲にしたいの。」

「舞輝のプロ根性には負けるよ。」

翔は笑つて言つた。

舞輝はニシコリ笑つて「じゃあね」と言つて帰つていった。

達弥さん、ヤキモチ妬いちゃうかしら?
早く帰つて寝よ。

当口。

入りをして、稽古着に着替えをしてメイクから始めた。
发声や、ウォームアップをし、軽い昼食。

リハーサルをし、開演を待つ。

劇団の所有する劇場ロビー。

愛海たちと達弥たちもすでに揃っていた。
席は前から5列目中央とかなりいい場所。

「さすが舞輝！」

舞台鑑賞が趣味の曉子が大感激中。
一人一人に渡されたパンフを見た。

「舞輝主役じゃん！」

千春が言った。

「お前知つてたんだろ？」

廉が達弥に尋ねた。

「いや、知らないよ。ただ、翔くんと踊るからヤキモチ妬かないで
くれって。」

「舞輝のことだから、誰にも話してないと想つ。私も知らなかつた
し。」

愛海が笑つて言った。

開演を合図するベルが鳴つた。

ロビーにいる人たちが席につく。愛海たちも、なんとなく緊張してきて背筋をピンと張つた。

徐々に会場が暗くなる。音楽が流れ出した。

「本日は、TMCアカデミー第10期生、卒業公演にお越しいただきまして誠にありがとうございます。第1部//ユージカル 聖剣伝説 開演いたします。」

幕が上がり拍手が沸く。

舞輝はある国のお姫様の役。

平和だった聖剣を持つ王の時代、反乱軍に襲撃されその剣を国ごと奪われた。

今その国を支配している新しい王は、國民からひっぱった税で裕福な暮らしをしていた。

舞輝姫が暮らす国は、何かと王の政治に口をはさみ國民を守つている。

王はその国が邪魔でならなかつた。

そこで、王は舞輝姫を城に招いた。

使者の迎えで乳母と旅に出発する舞輝姫。

舞輝姫の夢では、白馬に乗つた騎士が迎えにくるはずだつた。

なのに・・・

迎えに来たのは徒步できたのは、金と権力が全ての馬に乗れない騎士。

この旅の行く手に何が待つてゐるのか・・・。

途中、休憩をとる森で舞輝姫は散歩にでた。

そこで出会つた青年と恋に落ちる。

二人は時間を忘れて語らつてゐると、青年の仲間が森の守り神が馬に乗れない騎士によつて奪われたと伝えられた。

舞輝姫はその騎士の客人、青年の仲間によつて二人は引き離されてしまつ。

城に到着すると、王は滞在の記念にと、舞輝姫に森の守り神が渡された。

聖剣をもつてゐるから何をしてもいいのかと、青年のいる森に返すされた。

ように要求。

生意気な姫に怒った王が王子と結婚させるために招いたことを明かし城に閉じ込められてしまつ。

結婚式は7日後。

婚礼を祝う祭典で、青年が舞輝姫に会いに行く。

隙をみて青年は姫に近づき、再会に一人は口づけを交わす。

そのまま逃走を試みるが、兵士に囲まれてしまつ。

舞輝姫は青年を追わないのなら城に戻ると交換条件を呑み、馬に乘れない王子との結婚式の準備を黙つて行う。

一方、青年は自分の身代わりになつてくれた姫を助けに行くべくして、仲間を密かに集め始めた。

そのことを伝えに、城の窓から青年は現れた。

必ず助けに行くから待つててくれと。

今まで見たコスプレちくな格好ではなく、ドレスに身を包みグツと大人っぽさをだしていた。

舞輝姫と青年の踊りではこつちがキュンとなつてしまつた。

本当に愛し合つてゐるかのように、短い時間で愛を伝え合つ青年とのダンス、演技とは思えないほど舞輝姫は幸せそつだつた。

ハッピーホンドで幕はおり、休憩を挟んで第2部。

今度はダンスばかりのショー。

「メインダンサーチームにいるよ。凄いなあ！」

と、興奮気味の廉。

幕開け、黒い帽子にタキシード姿で登場。ステッキを持って軽快に踊る。

生き生き踊る舞輝を見て、

これがホントの舞輝・・・。

少し距離を感じてしまった。

バレエのシーンでは、ドンキ・ホーテ。赤と黒のチュチュに扇子を持って踊る。舞輝のソロと、翔のソロの後、二人の踊り。一人の息はぴったりだつた。

モダンのシーンでは、テーマは「FOREVER LOVE」。舞輝と翔がメインで進んでいく。しつとりとした曲に淡いピンクの衣装。

惹かれあうふたり。

翔が高度なリフトやジャンプで愛を伝える。

それに応える舞輝。

いつしか二人の気持ちは一つになり、口づけをする。曲も変調し、さらりと盛り上がりを見せた。

愛海の目から自然に涙がこぼれた。

達弥も涙がこぼれていた。

二人が見せる愛に感動していたのだ。

互いを信頼しあっているあの二人だからこそできたにちがいない。

曲が終わると、凄い拍手が会場を包んだ。

照明が落ち、上手に引っ込んだ舞輝と翔はなかなか收まらない拍手に抱き合って喜んだ。

フィナーレまではテンポよく演目が進み、フィナーレのエトワールは舞輝だった。

素晴らしい歌声で始まったフィナーレ。

全員が達成感に満ちた顔でお辞儀をしていく。

終演したロビーでは、「今年のせ、今まで一番よかつた」と、ロクに聞こえてきた。

広場に出演者が出てきたとこ「アナウンスが流れ、みんなで向かった。

広場に行くと、たくさんの人でいっぱい返していった。舞輝を探すと、翔や仲間とふざけあつていた。

「舞輝！」

愛海が呼ぶと、舞輝は駆け寄つてきて抱きついた。

「何ー！びっくりすんじゃん。よく頑張ったねー感動したよ。」

愛海も舞輝をギュッとしました。
翔が達弥に近づき、

「あの、達弥さん・・・」

「ん？」

「すみませんでしたー。」

と、深く頭を下げた。

「おこおこーなんの」とだよ？」

達弥は言つた。

「その・・・舞輝とキス・・・ホントすみませんー。」

「今回だけじゃないだろ?」

と、達弥は突いてやつた。

「いやーあの、それは・・・」

焦つている翔。

「いいよ、まだ舞輝ちゃんに片思い中だから。絞めてやるつかとは思つたけどな。」

達弥は笑つて言つた。

「それに、さつきのはホントに感動したよー翔くんと舞輝ちゃんの信頼関係にはかなわないよ。」

と、続けた。

達弥の言葉に翔はホッとした。

突然、「マイー」と言つながら舞輝の輪に近づく男が現れた。舞輝の顔が硬直した。

「俊・・・太。」

「あんた・・・・何しにきたのよ?」

と、燐海も気づいて言つた。

「なんだ、お前もいたのかよ。」

俊太は言つて舞輝に近づき、

「マイに会いたかった。」

廉たちを搔き分けて舞輝を抱き始めた。
全員があんぐり口を開けて見ていた。

「俊太、どの面下げてこんなとこにいるのよ。」

愛海は言った。

「相変わらずひつねる奴だな。かあさんに聞いたんだよ。
「愛海に向かってそういうこと言わないで。」

舞輝が怒った。

「マイ、なんで怒ってんだよ？マイを迎えてきたんだ。」

「は？」

舞輝は目を丸くしている。

達弥と翔は顔を見合せた。

「俺達、やり直そう。」

俊太が言った。

「何を言つてゐるの？』

「やっぱ俺には、マイしかいないよ。』

「俊太・・・・（怒）』

今にもプツンと泣きそうな愛海を舞輝は止めた。

「愛海、落ち着いて。俊太、あつちで話し聞くから。」

舞輝は俊太を連れて端のほうへ行つた。
廉は興奮する愛海を落ち着かせた。

「誰?」「

「昔の彼氏。それ以上は言えない。」

「達弥がいるから?」

愛海は首を横に振つた。

「達弥さんと出会つて、ようやく舞輝が過去から立ち直りつとして
るの。そうすれば舞輝の口から達弥さんに話すと思うの。
それなのに・・・それなのに・・・あのバカ! こんなとき。」

達弥は舞輝たちの方を見た。

俊太という奴が舞輝にベタベタしている。

「迎えに来たつて?」

舞輝は俊太に聞いた。

「俺、貯金したんだ。これで式あげられる。マイ戻つてきてくれる
よな?」

「なに言つてるの。自分から出て行つたくせに。」

「あれからよく考えたんだ。どんな女と付き合つてもつま無いかな
いんだ。マイにふさわしい男になつて帰つてきた。」

「あたしはもう、俊太とは・・・」

「時間かけてまたマイに振り向いてもらひ。また連絡するよ。」

そう言つて俊太は帰つていつた。

「連絡するつたつて、番号知つてゐるの?」

舞輝は呟いた。

「「あんーしらけちやつたよね? 写真撮らうよ!」

明るく振舞う舞輝。

一瞬みんなは戸惑つたが、愛海も舞輝のテンションに合わせ始めた。すると、みんなも順に合わせてきた。

翔も面会者が来てそつちに行つてしまつたが、舞輝のことが気になつて仕方がなかつた。

「じゃ、そろそろー親たち来てるから。行つてくる。」

舞輝はみんなと近々食事することを約束して別れた。
閉館になつて、翔は舞輝を迎えて行つた。

「舞輝行こうぜ。」

「うん。」

親と別れて翔と楽屋に向かつた。

翔はなんて声かけたらいいかわからず沈黙が続いた。
それを察した舞輝が口を開いた。

「マジチューしてよかつたね。」

「ああ、達弥さん怒つてなかつたよ。」

「その心配しかしてなかつたの? 感想は?」

「サイゴーだつた。」

翔は照れながら言つた。

「するしないですげえ感情の入り方が違つた。」

「同感。いくら稽古しても物足りなくて、導き出した答えがマジになること。ぶつつけ本番だつたけど、正解だつた！」

舞輝は満足げに言つた。

「なあ聞いていいか？」

「ん？」

「さつきの奴なんなんだ？馴れ馴れしかつた。」

舞輝の顔から一瞬笑顔が消えた。
でも、また二コッとして

「ヤキモチ？」

「ばつ、違うよ。」

「昔の友達だよ。」

舞輝はそれだけ言つて黙つてしまつた。

舞輝は楽屋に戻つて支度を済ましてキャリーバックを引いて外にでた。
翔や聰太は重い機材を片すために残つている。

門を出て、横断歩道を渡つると右を見ると、歩道に横付けした車と達弥が立つっていた。

「達弥さん。」

「『めん、勝手に待つてた。一緒に帰らない?』

「はい。」

舞輝は達弥の前で足を止めた。

「ずっと待つてくれたんですか?」

「ああ。」

達弥は舞輝の顔を見たら抱きしめずにいられなかつた。舞輝も達弥の胸に顔を埋めたかつた。寄りかかりたかつた。

「達弥さん、『こまマズイです。』

と言つて達弥から離れた。

「『めん・・。』

達弥は舞輝を助手席に乗せて荷物をトランクに入れると、車を発進させた。

「『の後何もない?』

達弥は聞いた。

「ありません。」

「『のままドライブしてかない?』『飯食べて。』

「いいですよ。明日も休みだし。」

「じゃ、決まり。着いたら起こすから寝ていいからね。」

達弥は嬉しそうだった。

走っている間はドライブを楽しんでいた舞輝だが、渋滞にハマつてしまはらくすると寝てしまっていた。

達弥は舞輝の寝顔を見た。

俊太のとこに戻るなんてないだろうか・・・

渋滞を抜け、目的地に着くと、達弥は舞輝を起こした。

「やだ、あたし寝ちゃった。」

慌てて起きた。

「いいんだよ、疲れてるんだから。つき合わせていいめんな。」

「そんな、全然・・・」

舞輝は達弥に続いて車をでた。

「ここ、みんなできた海。」

「うん。懐かしいだろ？その後夏にも来た。」

「花火したね。」

「したした。」

達弥が石段に座ると、舞輝も座った。

達弥さんは「コアを持つてあたしの隣に座つたんだっけ。好きだつて言つてくれたのもこ。」

あれから2年・・・。

しばらく夜の海を眺めた。

浜に座つてゐるカップルや、月夜に照らされキスをする恋人。
ちょっと写真に撮りたいなんて思つたりした。

「ねえ・・・」

「ん?」

「あの、俊太つて人・・・愛海ちゃんが昔の彼氏だつて。こないだ
言つてた“怖い”つてのとなんか関係あるんじやないのか?」

「うん。一步前に出れない原因作つた張本人。」

「やり直そうつて・・・」

「笑つちやうよね。自分から出でつた癖に。」

舞輝は遠くを見ていた。

「婚約者だつたんですね。」

「婚約者?」

「あたし、15で妊娠しちやつて。」

舞輝は過去にあつたことを話しあじめた。

「結婚できないでしょ。15じゃ。中学卒業して、親に用意しても
らつた部屋で一人で暮らして、俊太は働いて、あたしも高校には行
かないで俊太と生まる子供と一緒に暮らす準備をしてたの。・・・
・でもだんだん帰りが遅くなつてきた。帰らない日も増えてきた。
話しかけても返事してくれない・・・それでも我慢してきた。
ある夜ね、久しぶりに早く帰ってきたと思つたら荷物まとめだした
の。

何も言わぬで玄関に行く俊太を引き止めた。

そしたらね、今はお前といるのが耐えられない・・・重いよ・・・

つて言つて出て行つちゃつた。

その日から連絡取れなくなつて、俊太の親は大騒ぎ！
しばらくしてだつたかな・・・俊太みかけたの。

女の子と楽しそうに歩いてた。15の俊太には妊婦は重荷だつたのかなつて思った。

でも、許せなくてさ。俊太のこと追いかけたの。

そしてら急にお腹痛くなつて・・・救急車で運ばれた病院で流産しちやつた。

「

舞輝の目から涙が落ちた。

自然にお腹をさすつていた。

「辛かつたなあ・・・ごめんね・・・死なせるつもりはなかつたんだよ・・・俊太がいなくならなきや、赤ちゃんもいなくならくてすんだのに。」

そのまま俊太とは音信不通で終わつたの。」

話し終えて達弥を見ると達弥の目からも涙が出ていた。月に照らされ涙が光つて見えてわかつた。

「達弥さん、大丈夫ですか？」

舞輝はハンカチを渡した。

達弥はハンカチを持つ舞輝の手を掴んだ。

「行くなよ。」

達弥は舞輝を抱き寄せた。

「あいつのとこになんか行かせない。」

「

「達弥さん。」

「俺じゃダメ？舞輝ちゃんが好きなんだ。いつも舞輝ちゃんのそばにいたい。」

強く抱きしめる達弥の脇から舞輝は手を回した。

「あたしも達弥さんが大好きです。」

「舞輝ちゃん。」

「返事、遅くなつてごめんなさい。達弥さんはいつも私のそばにいてくれましたよ。あたしが今、一番そばにいたいのは達弥さんです。」

「

舞輝の目は真っ直ぐ達弥を見ていた。

「舞輝ちゃん・・・」

達弥が言つと、舞輝は笑顔を見せた。

「俺の好きな顔。」

達弥は舞輝の頬をつたう涙を拭つと、優しく舞輝にキスをした。

まばゆいばかりの月と星たちは、海にキラキラと輝きを放ち、一人を祝福しているようだった。

しばしの春休み。

お世話になつたダンススタジオに顔を出してレッスンをいい、達弥とデートに行つたり。

充実した休みを過ごした。

休み明けは、卒業生の集まり。

「よつ！ 舞輝。」

翔が声をかけてきた。

「よつ！」

舞輝も言った。

「元氣か？」

「何？ どしたの？」

舞輝は眉にシワを寄せた。

「ほら、変な奴きて落ち込んでたじゅねえか。」

「心配してくれてたんだ？」

舞輝は翔の顔を覗き込んだ。

翔は少し顔を赤らめた。

「そりや、大事な友達だからな。」

「ありがと。翔大好き！」

舞輝は翔に抱きついた。

「あつ、友達としてね。」

と、補足した。

「いい加減、達弥さんの気持ちに答えてやれよ。マジ舞輝に惚れてるから。」

真面目な顔で言つ翔に舞輝は吹き出して、あの夜のことを話した。

「そつだつたのか！よかつたな。つていうかさ、笑いすぎ。」

舞輝はまだ笑い転げていた。

「だつて、翔が真面目な顔で・・・あははは
「なんだ？たのしそうじやねえか。」

聰太が到着。

「聰太！おはよ。」
「おう。」
「来るの遅い！聰太にも見せたかった！翔の顔。」
「おい、言うなよ！」
「なんのこっちゃい。」

集まりでは、入団式の説明とその後の予定の振り分けが行われた。舞輝と翔は一人して夏に公演が決まっている新作に出ることになった。

卒業公演での一人のダンスが評価され、新作の出演が決まったそうだ。

もちろん聰太も。

その後、食堂でお祝いをしたのは言つまでもない。

桜満開の春。

休日の舞輝は陽気に誘われて公園へ散歩に来ていた。

愛海に達弥とのことを報告したら抱きついて喜んでいた。

「舞輝偉い！」

だつて（笑）

振り返れば、愛海が無理やりテレビ局や、その後誘われた食事、ドライブに引っ張つて連れて行かなかつたら、まだ恋なんてする」となかつたかもしれない。

達弥さんと出会えたから、翔や聰太と仲良くなれた。達弥さんと出会えたから、引きずる過去から抜け出すことができた。

達弥はゆっくり時間をかけて舞輝向き合つた。
一番大事に舞輝を想つている。

今の舞輝には達弥を一番大事に想うことができる。

木陰のベンチに腰を下ろして、桜を見ながらそんなこと考えていた。

ほつぺに冷たいものがあつた。

振り返ると、達弥がジュースを持つて微笑んでいた。

「おまたせ！」

舞輝の顔が自然に笑顔になる。

今日はどこへ行くつか？

綺麗な桜が見えるところへ。

鎌倉でも行く？

素敵！

これからは一人で綺麗な風景を探しに散歩しよう。

終わり

(後書き)

結末は”ハッピーエンド”これ当たり前です。

主役は死なないと一緒に。

これが苺タルトのスタイルであります。

これは、苺タルトが高校生のときに書いたお話です。
何度も何度も書き直して、今日ここに投稿しました。

これでもまだ足りないかも知れない・・・でも、大事な作品です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8798c/>

いつもきみのそばに・・・

2010年10月29日06時14分発行